

ウイジャ盤のゼレ

お葬式が終わるまでの1週間は、奇妙なお祭りのように、ひんやりとして、そしてひりひりとして、足元がいつも傾いているような、ぽっかりとした1週間だった。

出張で出かけた外国で、おとうさんは無惨にも車にひかれた。遺体がおかあさんに付き添われて飛行機で日本に帰ってきた。

おそろしかった。起きたことのすべてが、意味も手がかりも何もなくて、すべすべの闇のようだった。

おとうさんが死んだ。

それは、狂おしいほどに謎なこと、気を失ってしまいそうなほどにわけがわからないことだった。

あの日、わたしは始まったばかりの1時限目の国語の授業を抜け出て職員室に行った。朝の太陽が誰もいない職員室を黄金色に照らし出していた。教頭先生が私の顔をのぞきこむようにして受話器をさしだした。わたしの耳におかあさんの声が冷たい水のようにふるえながら流れ込んだ。おとうさんが交通事故にあったから、と。

わたしは三年一組の教室に戻り、クラス中の好奇の視線のまん中で教科書をカバンにしまい、そして国語の先生に一礼をして外に出た。

がらんとした廊下を歩き、そして靴をはいて校庭に出ると、大きな大きな青空が頭の上いっぱいになり、そのアズール色は初めて目にする不思議な色のように、わたしの心の中にまっすぐ、たくさんたくさん流れ込んできた。

空のアズール色は、バスに乗っても、ずっとわたしのそばを離れなかった。まるで、わ

たしに何かを伝えようとでもするかのようには、アズール色はわたしの目の端でまばたき、意味ありげに光り輝き、でも、わたしが耳をそばだて、そして目をこらして見つめると、急によそよそしく、それはただの青空に変わってしまったのだった。

家のドアを開けると、玄関に見慣れない白のポンプスがあった。おばさんが奥から小走りやってきた。「ひなちゃん」と言ったきり、おばさんは両手で顔をおおい、玄関で立ちままだ泣き出した。

奥のリビングからおかあさんのすすり泣く声が聞こえてきた。それは壊れて音階をなくしたフルートのようだった。

わたしは感じた、おとうさんが死んだことを。

怒りがこみあげた。わたしはカバンを思い切り玄関にたたきつけた、何度も、何度も。でも、すぐにわたしは希望を見つけた。わたしは死んだおとうさんを見たわけじゃない。この目でおとうさんの死を確認したわけじゃない。遠い外国でのことだ。その人はおとうさんじゃないかもしれない。

それから1時間もしないうちに、おかあさんだけが成田空港に向かった。わたしは、そのまま、おばさんといっしょに家に残ると、おかあさんに言った。

なぜだかわからない。

きっと、おとうさんの死体を見たくなかったから……。それをわたしが見ない限り、おとうさんは外国に出張したままなのだ、いつまでも。わたしがそれを見ない限り、おとうさんは死なないのだ。

でも、3日後、わたしはおとうさんを見た。

おとうさんはドライアイスの白い煙に体中を包まれて、まるで冷凍された不思議な魚のようにして家に帰ってきた。

棺に横たわったおとうさんに、さよならを言いなさいとおかあさんが言った。わたしの体は、怒りと恐れで石のように固く重くなった。わたしは祭壇の前に座ったきり、動こうともしなかったし、動けもしなかった。わたしの両手はこぶしをつくっていた。

わたしの目の前の祭壇の向こうには、ただおそろしいばかりの暗闇が広がっていた。それは、無限という名の暗闇だった。

おとうさんが永遠にいなくなる。それは、無限という名の何かの恐ろしさだ。無限という名の悪魔が、おとうさんをさらっていくのだ。無限という名の悪鬼が、おとうさんが生き返らないように、時間を一方向にだけ笑いながら巻き上げていくのだ。

わたしは無力だ。死の前で、無限の前で、わたしは、ただの虫けらだ。

涙は流れない。ただ、わたしは、わたしの怒りと悲しみを、おかあさんに向かって、まるでだっ子のようにしてぶつけた。

その日のうちにおとうさんは焼かれ、煙になった。

おとうさんを焼く煉瓦と鉄の炉の中からは、ゴーという嵐のような音が吹き出した。それはまるで、まがまがしい異世界へとつながる抜け穴から、この世のものがすさまじい勢いで奪い取られていくときの風の叫びのようだった。

燃え残った骨や歯をみんなで拾った。真っ白だったり、黄ばんでいたり、黒ずんでいたり、いろんな色をした、いろんな大きさの骨を、バーベキューのあとかたづけをするようにして、みんながハシでつまんで拾った。

もちろん、それはおとうさんではなかった。おとうさんであるはずがない。それは、ただのカルシウムなんだ。それは、ただのバーベキューの食べかすなんだ。

おとうさんとは、そんなちっぽけなものじゃない。おとうさんとは、もっと気高くて、もっと豊かで、もっと精密で、もっと、もっと、もっと、ちがう他の何かなんだ。

でも、そんなおとうさんをバーベキューにして食べてしまったのは、だれ？ わたしは、

おとうさんを食べた者を決して許さない。たとえ、それが神様だとしても。

それからまた1週間が、ひんやりと流れていった。

おかあさんは家事が手につかず、食事は店屋物が続いた。おかあさんはいそがしそうにあれこれ電話をしたり、書き物をしたり、考え事をしたり、お客をもてなしたり、そしてときどき突然泣き出ししたりした。

わたしはおかあさんの泣き声にいらだった。おかあさんがうなだれて、涙をひざの上にとぼとぼとこぼす姿を、わたしは見たくなかった。おかあさんが泣くたびに、その涙はわたしたちを希望も何もない、どこか暗い国へと押しやるように思えた。

わたしはおかあさんがおばさんに向かってこう叫んで激しく泣き続けたのを忘れない。

「これから死ぬまですっと、わたしはぜったい幸せになれない」

それは、わたしにも幸せが訪れないということだし、わたしにはおかあさんを幸せにできないということだ。

ときどき、わたしはおかあさんがむしように憎くなった。

おかあさんのことをなぐったり、けとばしたりしたい衝動にかられた。そのたびに、わ

たしは部屋にとじこもり、ヘッドホンで耳をふさぎ、音楽を聴いた。でも、どんな音楽もひからびたケーキのようで、わたしの鼓膜から先、内側には決して入ってこなかった。

その日は土曜日で、学校は休みだった。

おかあさんはおとうさんの遺品を整理していた。ときばきと、引っ越しの準備をするように、その白いヒトデのような指と腕とで家中をひっくりかえしてはおとうさんの持ちものをより分けていた。

お昼に、おかあさんはわたしの部屋にやってきた。何も言わずに、骸骨のようにやせたからだでサッシの窓枠にもたれかかると、じっと外を見た。

東京の西にスカートのひだのように広がる丘の中腹に、わたしたちの住むマンションは建っている。その9階のわたしの部屋の窓からは、遠く東京が見渡せた。

「飛行機が見える」

おかあさんが言い終わらないうちに、玄関のチャイムが鳴った。おかあさんは黙ったま

ま玄関に向かい、わたしはおかあさんが見つけたキラキラ光る小さな針のような飛行機のゆくえを、おかあさんのかわりに目で追った。

玄関のドアが開く音がして、おかあさんと郵便局の人らしい男のひとの短いやりとりが聞こえ、そしてまたドアの閉まる音がした。そしてすぐに、おかあさんのすすり泣く声が聞こえてきた。

玄関をのぞくと、おかあさんは大きな段ボール箱におおいかぶさるようにしてすわりこんでいた。その箱にはあざやかなブルーの線が描かれ、赤いアルファベットがそのラインの上で躍っていた。箱の角はすりきれ、遠い旅をしてきたかのように、うすよごれていた。そうなのだ。実際、それは遠い旅をしてきたのだ。

それはフランスから届いた、おとうさんからの小包だった。

おかあさんから段ボール箱を奪い取るように引き抜くと、わたしは箱を封印している透明なテープにつめをたてた。

まぎれもなくおとうさんの字で、宛先のすみに、それだけ日本語で、おかあさんと私の名前が書いてあった。おとうさんが車にひかれたその日に、あの事故の直前に、おとうさんがパリの郵便局から出した小包だったのだ。

わたしは一瞬、奇妙な錯覚にとらわれた。本物のおとうさんはまだパリで生きていて、わたしたちが燃やし、埋葬した肉体はおとうさんの抜け殻だったのだと。

それはありえないことだと、頭でははっきりとわかっているのに、まるで夢の中にいるように、その錯覚はわたしのからだにからみつき、ふしぎな幸福感が広がった。

段ボール箱の中からは、大きさも包装もまちまちのいくつかの包みと、1通の封筒が出てきた。おとうさんからの手紙だった。

おとうさんは、こう書いていた。

《帰りの飛行機の荷物を少しでも減らしたいから、ひなたちへのおみやげを先に送っておくよ。アールデコ風のアンティークのアクセサリーと洋服はおかあさんへ。洋服はクリニャンクルののみの市で見つけた十九世紀のメイドさんの衣装だ。すごいだろ。数字やアルファベットが書いてある、あやしげで汚らしい板はウィジャ盤というもので、これは、ひなへのおみやげ。ホテルのそばの骨董品屋で見つけたもので、実はおとうさんが探していたものもある。フランスのものではなく、二十世紀の初め頃につくられたイギリス製だ。とても貴重なものだ。使い方は東京に帰ってから教えてあげよう。それから古本十冊はおとうさんのもの。ファイルに入っている書類なども仕事に必要なものなので、おとうさん

の机の上に置いてください。》

どの包みがウィジャ盤というものなのかはすぐにはわかった。それだけが平べったい、固い四角形の包みだったからだ。

手にすると、思ったより軽かった。クリーム色の紙の包みをゆっくり、ていねいに開けると、白の薄紙に大事そうに包まれたそれが現れた。薄紙からはアルファベットと鮮やかな色が透けて見えた。わたしは薄紙を破らないようにとりのぞくと、そのウィジャ盤というものを両手でかかげ、まじまじと見つめた。

大きさはちょうど画板ぐらいで、材質も画板のようだった。薄い板の上に紙が貼られ、その紙の上にアルファベットや絵が印刷されている。紙は黄ばみ、板の裏側も黒ずんでいる。

まん中にはエジプトのスフィンクスに似た建物の前に立つ古代の女性が描かれている。きっと、彼女はクレオパトラだ。剣をかかえた家来のような男性たちや楽器をもった女性たちを引き連れている。

その絵の上には2列になって扇状に、AからZまでのアルファベットが並ぶ。その上には「Mystic Board」という文字があり、さらにその両脇に「Yes」と「No」の文字があ

る。文字はすべて黒色だ。

四隅に描かれている絵は、きっとエジプトの神様に違いない。右上は OSYRIS、右下は ANUBIS、左上は ISIS、左下は SOKAR と、それぞれの肖像に名前のようなものが添えてある。

盤の下の端には、1 から始まって9 の次に0 で終わる数字が書いてある。

それにしても、いったい、これはなんのための道具なんだろう？ 子どもがアルファベツトや数字を習うときの教材のような感じがする。でも、それならなぜエジプトの神様の絵などが描かれているのだろうか？

わたしは、なぜ、このウィジャ盤というものをおとうさんは買ってくれたのだろうかと考えた。

おとうさんはこれを使ってわたしに外国語を教えるつもりだったのだろうか？ それとも、エジプトの神話に興味を持ってもらいたかったのだろうか？ それとも、ただたんに珍しくて、きれいだったから？

でも、おとうさんはこれを探していたという。おとうさんは日本にいるときから、ウィジャ盤というものを知っていて、探していたということになる。そしてついにそれをパリ

で見つけて手に入れ、でも自分のものにはせずに、わたしのおみやげにした。なぜ？

とにかく、ウィジャ盤というものが、なんのためにあるのかを知ることだ。死んでしまったおとうさんに聞こう。

そう思った瞬間に、わたしはハッと気づいた。死んでしまったおとうさんにはどうしたら連絡がつくのだろうか？

そして、とてもゆっくりと思い出したのだ。死んでしまったおとうさんは死んだのだと。わたしの体の奥深いところで生まれた恐怖が、まるで地震のようにガタガタと揺れながら全身を包んだ。

そしてまた、ゆっくりと思い出したのだ。死んでしまったおとうさんの行き先を誰も教えてくれなかったことを。おとうさんの行った先は天国なのかどうかを、誰も教えてくれなかったことを。

もちろん、中学三年生に向かって、あなたのおとうさんは天国に行ったのよなどと誰が言うだろうか。でも、だからこそ、おとうさんがどこに行ったのかを決して言うことのない大人たちに、わたしは恐ろしいほどに深い暗闇の匂いを嗅ぎとっていた。

わたしは混乱しながらも、このことだけは、はっきりと考えをまとめることができた。

おかあさんも、そしておばさんも、他の人たちみんなも、誰一人だって、そしてわたしも、おとうさんが天国へ行ったということを、その文字のままに信じてはいないのだと。

天国があればいい。ことと同じもう一つの世界があり、そこでおとうさんが暮らし始めていて欲しい。そうすれば、わたしが死んだら、またおとうさんに会える。

でも、そんな世界なんて、どこにあるのだ？ 雲の上にはない。雲の上には凍える真空が寒々と広がっているだけだ。その先には宇宙があり、そして宇宙には限りがあると理科の先生は言った。

その宇宙の限りの、その向こうに天国があるのだろうか？ だとすれば、おとうさんはどのようにしてそこにたどり着くのだろうか？ いったいどうやって？

そして、どうして人間は、そのことを知らないの？ 自分のことなのに、どうして自分のいちばん大事なことを何も知らないの？

わたしはおかあさんのことがどんどん嫌いになっていった。おかあさんがはいているソックスのアーガイルの柄を見るだけで胸が怒りでつまった。わたしはおかあさんとほとんど話をすることもなくなった。

一方で、おとうさんとの思い出は、いつどんな時にでも、突然に、短い映画のように頭の中を駆け抜けた。

それは、ささいな瞬間の記憶であることが多かったし、しかも、テレビコマーシャルのように、同じ記憶が何度も何度も頭の中に映し出されるのだった。それは匂いや、空気の感じや、暖かさや冷たさもいっしょに連れてきた。

家族で行ったアメリカ旅行や、沖縄や、遊園地や、そんな大きな出来事を思い出すことはまれだった。

突然に映し出される思い出は、たとえば、近所の踏切の朝の光景から始まる記憶だった。始まりにはおとうさんは映っていない。わたしは、踏切のカンカンと鳴る音を聞いている。夏の光がアスファルトをキラキラ輝かせ、まだ涼しい風のそよぎの内側には、昼前にはやって来るはずの猛烈な暑さの予感がいっぱいに詰まっていた。電車が通り過ぎ、踏切

の遮断棒が上がると、わたしはカバンを振りながら走り出す。ゆったりとした坂道の上のほうをわたしは見る。遠くに、おとうさんの小さな後ろ姿がある。わたしはどんどん走る。おとうさんの後ろ姿がどんどん近づき、どんどん大きくなる。わたしの視界がおとうさんの背中ではいっぱいになり、「おとうさん」と呼ぶと、おとうさんは振り返って、「ひな」と言っていて立ち止まり、わたしを見つけて嬉しそうに笑う。坂道の横を走る線路を、特急電車が通る。わたしが言う。「特急だよ」。

映像はそこで止まる。でも、匂いや風の感覚だけは消えずに、まるで抱き上げてほしいとねだる小さな動物のようにまとわりつく。

そして、時にはおとうさんの声も聞こえた。もちろん、空耳だ。でも、はっきりと、「ひな」とわたしを呼ぶ声を、わたしは何度も何度も聞いた。

そうして一ヶ月があつという間に過ぎていった。おとうさんがいないという当たり前じゃないことが、どんどん当たり前になっていく。それでもわたしは、ひんぱんに、何度も、おとうさんがいないということを忘れた。

やがて四十九日の法事があった。

今までこの世とあの世の中間にいたおとうさんが、これでほんとうにあの世の人になるのだ、とおばさんが教えてくれた。

どうしてそのことをもっと早く私に教えてくれなかったのだろう。中間にいたのなら、わたしの声がかきこえたかもしれない。わたしの手が届いたかもしれない。わたしはおとうさんを連れ戻すことができたかもしれないじゃないか。おかあさんもおばさんも、なぜおとうさんを引き戻してくれなかったのだろう？ なぜ、あきらめたの？

わたしはずっと怒っていたのだ。この一ヶ月と半分の時間のあいだ、わたしは怒ってばかりいたのだ。誰に？ 神様にだ、この宇宙をつくった人にだ、死というものを人にもたらす無慈悲な何者にかだ。

わたしの怒りはおさまらない。きっと、永遠におさまらない。

大人たちはなぜ怒らないのだろうか？ なぜおかあさんはすぐに敗北を認めて、降参の涙を流すのだろうか？

わたしはおとうさんを取りもどす。神様を殺してでも、おとうさんを取りもどしたい。

ウィジャ盤のことは、まったくわからなかった。どんな辞典を引いても、わたしは手がかかりすら見つけることができなかった。だいいち、英和辞典で調べようと思っても、正しいスペルがわからなかったのだ。

weja' wejya' wezya' wejha' ujia' uiza——思いつく限りの組み合わせで調べたけれど、そんな言葉は英和辞典にも、学校の図書館で調べた仏和辞典や独和辞典にものっていなかった。もちろん、国語辞典にも、百科事典にも、ウィジャ盤なんていう言葉はなかったのだ。

でも、その四十九日の法事の日に、偶然に、そして思ったよりもかんたんに、ウィジャ盤の謎は解けたのだった。

わたしの部屋は、法事にやってきた親戚の子供たちの遊び場になってしまっていた。わたしは、勉強机に頬杖をつけてぼんやりと子供たちが遊ぶのを眺めていた。

おじさんの子どもたちがカードで遊んでいた。それがテレビアニメのカードだということとは、わたしにもわかった。そのカードの絵柄が、なにかしら神話的なイメージだったから、わたしは見るともなしに幼い兄弟が取りだすカードにあいまいな視線を落としていた。

するとわたしの目がざらざらした。ざらざらと、何かがわたしの目の中に飛び込んできたのだ。目をこらした。「ウィジャ盤」の文字が一枚のカードに浮かび上がっていた。わたしは思わず、小さなすばしこい手からカードを奪い取った。

そこには確かに「ウィジャ盤」の文字があった。どうして子どもたちが遊ぶカードに、わたしがずっと探していた言葉があったのかと驚きながらも、そこに書かれていた英語の文字をわたしはいそいでサインペンで机の上に書き写した。紙やノートをさがすのもどかしかった。

ouija

カードには「畏」という言葉も印刷されており、カードの大部分を死に神のような恐ろしい顔をした怪物の絵が占めていた。それははっきりと死のおぞましさを伝えようとしていた。

口をポカンと開けてわたしを見ている、おじさんの子どもにカードを返すと、わたしは英和辞典を開いた。

ouija という言葉が、目の前に現れた。まるで、秘密の鍵で開けた秘密の部屋のように……。

ウィージャ《心霊術で用いる文字・数字・記号を記した占い板》

「心霊術」という単語が頭に突き刺さった。手の平が汗で突然湿って、額がジンジンと熱くなって、呼吸が一瞬止まった。

それから、わたしは百科事典で、「心霊術」という言葉を引いた。そこには、「スピリチュアリズム」の項目を見るように書かれてあり、わたしはこんどは「す」の項目が入っている別の一巻を本棚から取り出した。

「スピリチュアリズム 広く霊の实在と人間への種々の働きかけを認める立場で、へ心霊主義へ心霊学へなどと訳される。古来、洋の東西を問わず見られるが、狭義には1848年以降の近代スピリチュアリズムを指して用いられる。米国ニューヨーク州の寒村ハイズビルで起こったとされる、フォックス姉妹と死者との交信がその画期。以後多くの霊媒が出、交霊会が催されて、物体浮揚、エクトプラズム、異言、透視などの現象が注目されるようになった。ヨーロッパにも波及し、その科学的究明を目指して1882年、心霊研究協会が設立された。日本では、井上円了の活動や福来友吉の念写研究が知られる。」

私の胸の中は熱い蒸気で満たされ、両手の指はしびれるようだった。頭のとっぺんから背骨を通して、こきざみな振動がブルブルと体中に広がっていった。恐ろしくもあり、幸

せでもあり、わたしは、わたしという小さな容器の中で沸騰する液体の激しい渦の、その静まっているように見える真ん中の一点にいたような気分だった。

死んでしまったおとうさんはわたしと話をしたがっている。このウィジャ盤という装置を通じて、おとうさんはわたしに何かを伝えようとしている。だからこそ、死ぬ前にウィジャ盤を買い、わたしに送ったのだ。それ以外にどんな理由があるだろうか、ウィジャ盤をおとうさんが買ったことに。

わたしは、ウィジャ盤についてもっと知りたかったし、知る必要があった。どんなふうになれば、おとうさんと話ができるのか、具体的な方法がまったくわからなかったからだ。法事の翌日、学校の帰りに本屋で探してみたけれど、ウィジャ盤の使い方など、関係した本を見つけることはできなかった。

家に帰ると、スペルがわかったのだからインターネットで調べればいいと思いついた。

わたしは、おとうさんの部屋に行った。お葬式の後、初めてだった。

おとうさんの部屋では、夕陽の影だまりの中におかあさんが亡霊のようにうずくまり、おとうさんの書類を一枚一枚、仕分けして整理をしていた。わたしは、おかあさんを無視するようにして、おとうさんの机に座ると、パソコンの電源ボタンを探した。パソコンの

スピーカーからひび割れた和音が響き、そしてディスプレイがブルーに輝いた。

ディスプレイにさまざまなアイコンが表示され終える直前に、わたしの目はまたザラザラした感覚をおぼえた。すぐにそのザラザラのわけがはっきりと言葉になった。あるひとつの書類のアイコンの下に、ouijaの文字が描かれていたのだ。

わたしは引き寄せられるようにディスプレイに顔を近づけた。そのアイコンにはこう書かれていた。

Using a Ouija

ウィジャ盤を使う、だ。

のどがすぼまった。

おとうさんはわたしがおとうさんのパソコンの電源を入れることを知っていたのだろうか？ 知っていて、このファイルを置いたのだろうか？ わたしは確信した。そうにちがいないと。それ以外に考えられるだろうか？ おとうさんはおとうさんの死後にわたしにウィジャ盤を使ってもらうため、こうして文書を残したのだ。それは今にして思えば、とても強引で勝手な思いこみだった。

マウスをアイコンの上に持っていく手がふるえた。書類のアイコンをダブルクリックす

ると、おとうさんの残した文書がディスプレイの上に晴れやかに広がった。

英語と日本語の文書だった。オーストラリアのリンダ・ジョンソンという女性がウィジャ盤の使い方について説明した文章だった。おとうさんがインターネットで見つけ、保存したもののようだ。日本語はだから、きっと、おとうさんの翻訳だ。

わたしはプリントアウトのメニューを探しまわり、そしてプリントのボタンをクリックした。

やがて、Using a Ouija のファイルはプリンタからはき出されて9枚の紙となり、わたしはそれをつかんでおとうさんの部屋を出た。おかあさんはあいかわらず、亡霊のようにならなくて、頭にたれていた。

自分の部屋に戻ると、わたしは Using a Ouija を一気に読み終えた。

それは、こんな意外なことから語りはじめられていた。

『アストラル界に存在する者の数と種類は物質界のここよりもずっとずっと多い。だから、我々人間のことをからかおうという者や、無関心な者、または純粹な愛を抱いて近づく者など、アストラル界での彼らの地位によってその意図もさまざまなのだ。』

わたしはこのアストラルという言葉の意味がわからなかった。英和辞典にはのっていた

ものの、星のようとか、星気のとか、幻想的とか、そういう訳語があるだけで、はっきりとしたイメージがわき出てこなかった。なんとなく、宇宙のどこかにある、わたしたちの目に見えない世界のことだとは思っただけで、外来語辞典で調べてみたら、それははっきりと「心霊科学で幽体。幽界。肉体とともに人間を構成する超感覚的実体で睡眠中や死後に離脱するとされる」と出ていた。つまり、それは霊界と呼んでもよい世界のことなのかもしれないが、でも、そう言いたくない気持ちもあった。英和辞典の「星」という言葉の響きにわたしの心はこだわっていた。

そして、おとうさんの翻訳はこんなふうに行く。

『人間は死ぬとすぐに天使のような存在になるわけではない。ほとんどの人間は生前の姿とまったく変わらないままで、霊的に学び成長し続ける。死後にたどり着くアストラル界での地位は、その人のアストラル体のアストラル物質の密度によって決まる。人間は学ぶにつれ、密度の濃い重いカラを脱ぎ捨てていき、準備ができたなら、より高いレベルの世界へと旅立っていくのだ。そこには人間とは異なる者が存在している。』

わたしは人が死んだ後のことを、こんなふうにはっきりと自信を持って語ったものを読んだことがなかった。

これまで死というものに関心を抱いたことがまったくなかったからだし、死んだら人は天国に行く、いやただの無になるだけだ、というこのふたつの言葉以外の死後についての考えを、わたしは聞いたことがなかった。だから、わたしは英文でたった8行ほどのこの文章に、とても大きなショックを受けた。

同時に、おとうさんはわたしのそばにまだ存在している、生きているという希望が生まれ、穏やかな波のような何かがわたしの心に優しくうち寄せたのだった。

リンダという女性は、ウィジャ盤を使う際の、さまざまな注意も書きつらねていた。

たとえば、酔っぱらった一団が幽霊屋敷と知られる家で、ふざけた気持ちから降霊会をすると、地縛霊がやってくるということ。それらはだいたい、非業の死をとげた者たちだ。それらはただ悲しく混乱しているだけかもしれないし、あるいははっきりとした悪意を抱いて災いをもたらすかもしれない。

宝くじに当たるにはどうしたらよいかなど、利己的で興味本位な意図からウィジャ盤を使うおうとすれば、そこには悪戯好きな存在しか集まらないので意味ある答は得られない。それから、さまざまな例をもち出して説明した後、リンダはこう忠告していた。

『忘れないでほしいのは、ウィジャ盤はコンタクトのためのたんなる道具であるから、霊

的に発達していなくても使うことはできるが、その場合はでたらめにダイヤルする電話みたいなもので、よい結果が得られるかどうかは運まかせだということ。しかし、訓練を積み、学び、霊的に発達していれば、コンタクトしたいと願う人に正しく出会うことができるチャンスは大いに増えるだろう』

つまりおとうさんに出会うには、わたしは訓練を積む必要があるし、それがどういふことかわからないけれど、霊的に発達しなくてはいけないという。でも、わたしは楽観していた。わたしのウジャ盤の準備ができたなら、きつと、きつと、おとうさんのほうからやって来てくれるに違いないから、と。

文章の後半は、ウイジャ盤を使うための実際の方法がこまごまと書かれていた。どんな場所でやるのがいいのか、どんな時間にやるのがいいのか、準備するもの、おまじない、身につけると効果的なアクセサリー、悪霊から身を守る方法、などなど。そして、こう注釈されていた。

『亡くなつてから長い年月がたつてしまった家族はすでにこの地球界の近くにはいないかもしれないし、場合によってはすでに地上に生まれ変わつてしまつているかもしれない。もし、亡くなつた家族を名のる霊が現れたら、それが本当か確認する必要がある。その霊

に対して、その家族しか知らないことをたずねなさい。そのときに、あなたはその質問の答を頭の中に思っただけはいけません。心はまっさらにおかなくてはなりません。その霊があなたの心の中をのぞき見て、その家族のふりをする必要があるからです』

その「長い年月」がどれくらいかは書いていなかった。おとうさんが死んでから2ヵ月近くがたとうとしていた。早くしなくては、おとうさんが地球から去っていつてしまう。

だが、大きな問題があった。

ひとりではできないのだ。

少なくともわたしを含めて3人という人数が必要なのだ。つまり、これはヨーロッパ生まれのこっくりさんなのだった。

正式にはプランセットという道具に2人以上の人間が手を置いてやるのだけれど、ティーカップでもよいと書いてあった。このティーカップに手をそえるのが最低でも2人。そしてどの文字をティーカップが指し示したかを記録する係が1人。この3人という人数がそろわなくては、わたしはおとうさんと話をするができないのだ。

でも、いったい、誰がわたしのこの計画に協力してくれるのだろうか？ わたしは気が狂ってしまったと思われるかもしれない。気味悪がられるかもしれない。でも、早くしな

いとおとうさんが地球のそばから去ってしまおう。

ああ、誰にわたしはこの計画をうち明けたらいいのだろうか？

2

わたしはいつものように電子レンジでトーストをつくり、電子レンジでミルクを温め、それをひとりぼっちで食べ終えると、起きているのかいないのかわからないおかあさんの部屋の前を通って玄関へ行き、そして靴をはいた。もう何週間も『行って来ます』なんて言っていない。わたしはカバンをつかむと、ドアを開け、外に出た。

大きな中庭に向かって開いている通路には夏のおいがした。少し湿った、それでいて光の粒がからからと触れあう、草原のおいだ。それはきつと近所の神社のうっそうとした森から漂ってくるのかもしれない。

そういえば、もうじき夏休みなのだ。去年までのわたしなら、夏休みが待ち遠しくてた

まらず、一日があまりに長く、のんびりしていることをのろったものだけれど、今は違った。

むしろこの夏空のどこかにいるはずのおとうさんが地球の引力につなぎとめられている今のうちに、おとうさんと話をしなくてはと、わたしはジリジリといらだち、時が限りなくゆっくりと進むようにと願った。

だから、わたしは夜のうちに心に決めていた。オリエとハルミのふたりにわたしのこの計画を話すんだと。

わたしには、友だちと呼べるのは、このふたりしかいなかった。

いまのマンションに住むために二年の時に転校してきたわたしにとって、すでに出来上がっているクラスのグループに混じるよりは、ひとりぼっちでいることのほうが楽だった。

だから、クラスは違っていても同じ軽音楽部だったオリエとハルミとのほうが、話をする機会がクラスの子よりも単純に多かった。わたしとふたりとは、たぶん、ただそれだけの関係だ。それを友だちと呼んでいいのなら、この中学のわたしの友だちは、オリエとハルミしかない。

部活にはおとうさんの死以来一度も顔を出していない。

ふたりはおとうさんのお葬式に来てくれていたけれど、わたしに声をかけはしなかった。ふたりはなぜかほにかんだような表情を浮かべてわたしを遠くから見ているだけだった。わたしとの関係の親密さは、きっとそれほどの距離でしかなかったのだ。

だれにでも親友というものがひとりはいるものなのだとしたら、わたしにはそんな友だちはかつて一人もいなかった。幼稚園の時も、小学校の時も。そのことに、今さらながらに気がついたし、親友という名の特別などもだちがいるということそのものが、わたしには想像もできなかった。

「ひなのって、いつも、さめてるよね」

そんなふうに小学校六年の時に言われたことがある。さめてるって、いったい、どんなふうな心のことを言うのだろう。わたしには、さっぱりその意味がわからなかった。

わたしがひとりっこで、甘やかされすぎたから、わがままなこになってしまった、友だちがたくさんできないのはそのせいだと、おかあさんに言われたことがあった。それはいつか、なんかの拍子におかあさんの怒りがあったわたしに、おかあさんがぶつけた言葉だ。自分には友だちがいないとわたしが意識するようになったのは、たぶん、おかあさんのこの言葉がきっかけだったし、この言葉のせいで、もっともっと友だちができなくなったと

わたしは思っている。

でも、小学六年のわたしには、わたしがどんなふうにも他のおおぜいのこたちと違っているのか、さっぱりわからなかったのだ。

ただひとつわかっていたのは、クラスの多くの女の子たちと違って、わたしは友だちと遊ぶよりも、ひとり空想することのほうが好きなんだということだった。

ひとりぼっちで家にいて、おかあさんのドレッサーを見ていると、わたしには化粧品のボトルが不思議な形の家に思えてきて、そしてその家に住んでいる不思議な人々の姿が見えてくるのだった。そしてわたしは、空想の中で、その不思議な人々にお芝居をさせて遊んだのだ。それはほんとうにワクワクする、とても幸福な遊びだった。わたしは何時間でも、そんなふうにして、空想がつくりだす世界でひとりすごすことができた。

それも中学生になる直前くらいまでで、やがて、わたしの空想の羽は重くなった。

そのかわりに見つけたのが、本と音楽だった。それはおとうさんの部屋に大量にあった。わたしはこの財宝に中学生になって初めて気づいた。

おとうさんは普通のサラリーマンだったけれど、大学時代はとっておしゃれなアーティスト系の学生だったよと、一度、おかあさんが話してくれた。美大の入試に落ちたの

で普通の大学に入ったんだと、おとうさんがわたしに言ったこともあった。

おとうさんは、わたしがおとうさんの部屋から勝手に本やCDを持ち出すことをとても喜んだ。

わたしはみんなが漫画や少女小説を読んでいるときに、シュトルムの『みずうみ』を何度も読み返したりしていたのだ。

いちばんわたしを興奮させたのは音楽だった。パンクロックからクラシックまで、ありとあらゆるCDがおとうさんの部屋にはあった。わたしはジャンルなどにおかまいなく、いろんな音楽に夢中になった。音楽はわたしの心の中に、たくさんの憧れや幻想や、それから名付けることがとっても難しいさまざまな感情を産みつけた。それらはわたしの孤独をまるで真昼の月のように、深刻だけれど、でも少しだけ間抜けなものにしてくれた。音楽さえあれば、わたしはひとりぼっちではなかったのだ、完全に。

その宝物が連れていってくれる世界にくらべると、学校でなされるすべてのことはほとんどもなくくだらないことに思われてた。

学校で、夕べ見たテレビの話に夢中になっている女の子たちや、いつもへんな匂いをまとっている男子たちが、ときどき、わたしには目的もなくさまよう夢遊病の人間たちのよ

うに見えた。

そんなわたしに、「適當」以上に学校でひととまじわるなんて、無理だった。

わたしは恋愛にしても、どこか遠くの別次元で、完全な物語がわたしのために準備されているに違いないと思いきんでいた。それはむこうからやって来るはずのものだから、わたしは目の前のへんな匂いのする男子たちを遠ざけながら、それが訪れるのをただ待ち続けなければならないのだった。

放課後、わたしは軽音楽部の部室がある、体育館の横の建物に向かった。オリエとハルミに何をどういうふうに言えればいいのか、一生懸命考えたけれど、少しもまとまらないままに、夏の強い光に押し黙るかのようなモルタルの2階建てのクラブ棟が近づいてきた。おとうさんがまだそばにいることは、わたしは確信していた。今朝、そのことを告げているとしか考えようのない出来事があったからだ。

わたしはラジオ内蔵の目覚まし時計で目を覚ます。毎朝、それは6時50分に、あるFM局の音楽が鳴るようにセットされていた。

でも、今朝はなぜか、ほんとうに不思議なことに、いつもの局ではなかったのだ。知ら

ない間にわたしがつまみに触れてしまったのだろうか？ いえ、そうではない、きつと。

わたしの眠りにまぶしく突き刺さったのは、音楽ではなく、誰かが一人語る声だった。

それは男性の声で、わたしはその低い声から伸び出た指でまぶたを押し上げられるようにして目を覚ました。

その声は、こんなことを言っていた。

「サンジェルマン教会のあたりには日本人観光客も多くて、そのせいか、向かいにある、あの有名なカフェ、ドウ・マゴのテーブルにも日本人がたくさん陣取ってます。ここから一つ辻を入ったところが、ジャコブ通りです。そばにはボザールもあり、画廊も多く、芸術の町という風情を醸し出しています。ジャコブ通りには小さいながら、素敵なホテルが何軒もあります」

わたしは体が震えた。ジャコブ通りはおとうさんがクルマにひかれた通りであり、おとうさんはそのジャコブ通りにあるホテルに泊まっていたからだ。

男の声はこう続けた。

「それでは、きょうの会話を復習しましょう。『わたしは日本に帰ります』」

そして、フランス語らしい女性の言葉が聞こえ、もう一度、男性が言った。

「彼女はわたしを待っています」

そしてフランス語。

わたしは確信した。これはおとうさんからのメッセージだと。それ以外に、どう解釈したらいいのだろうか？　これほどまでの一致を偶然として片づけることなど、わたしにはとてもできなかった。

クラブ棟の入口はちょうど太陽を背にして紫色にかげっていた。

わたしが入口のアルミのドアのノブに手をかけると同時に、わたしの肩を後ろからたたく手があった。ぶるつと震えて、そして振り向くと、そこにハルミとオリエがいたのだ。

「やっと来たね」

背の高いハルミがわたしを少しだけ見おろすようにしてそう言うのと、隣のオリエが太陽の光をまぶしげに右手でさえぎりながら、一重まぶたの目でかすかに笑った。

「アクア、せいぞろいじゃん」

ハルミはそう言って、わたしのかわりにドアのノブを引くと、クラブ棟の中へとわたし

の背中をそっと押した。

軽音楽部の部室にはいると、数人の男子がギターをつまびきながら、わたしの顔をじっと見つめた。わたしは会釈をした。ハルミが事情があつてわたしがきょうまでここに来れなかつたのだと簡単に説明してくれた。

「アクアの一人つてわけ」とハルミは付け加えた。

わたしは思い出した。ハルミとオリエとわたしの3人でトリオをつくるんだとはしゃいだことを。

「アクアっていうの、トリオの名前？」

ひとりの男子がハルミにたずねると、もうひとりがまたこうきいた。

「アクアつて、カルロス・ジョビンのアクア？」

「は？」とハルミは首をかしげると、こう続けた。

「スペイン語で水の意味なの、アクアつて」

「オレもそういう意味で言ったんだけど」

そう言つて男子はうつむいてギターをつまびく自分の左手と右手を交互に見た。

ハルミはまた首を少しかしげて、それからわたしに向かい、外に出ようとほほえんだ。

オリエに手を引かれて部屋を出ると、わたしはここにやって来た目的を忘れまいとくちびるを噛んだ。でも、どこで、どういうふうに切り出せばいいのだろう。

わたしは引かれるままに歩き、やがて校庭の隅にあるベンチに腰を下ろした。目の前にはボールよけのネットが舞台の紗幕のように張られ、そしてその向こうにはサッカーのゴールがあり、幾重にも重なった巨大な蜘蛛の巣のように陽にきらめくそのネットの向こうでは、悲しみや死と無縁の無邪気で粗野な男子たちが動物の言葉にしか思えない声を交換しながら左に右に走っている。

ハルミが足元の地面に小石で文字を書きはじめた。

「ほら、わかる？ H A R U M I でしょ、H I N A N O でしょ、で、O R I E。なんか、気づかない？ 頭文字だけを見てみてよ。Hが二つで、Oがひとつ。わかんない？」

なにを言おうとしているのか、わたしにはまったくわからなかった。ハルミの顔を見つめると、ハルミは瞳を黒々とふくらませてこう言った。

「H 2 O。ね、水よ。水素二つに酸素がひとつで水でしょ。わたしたち、水の分子と同じなのよ。だから、アクアにしたの、トリオの名前を。ヒナノに相談しなくて悪かったけど

「x」

ハルミがオリエに向かって首をかしげると、オリエは黙って何度かうなずいた。

わたしは、胸の奥で「ばかばかしい」とつぶやいた。と同時に、この気持ちを気づかれまいと反射的に唇を横に引いてほほえみをこしらえた。そのまま、左のオリエに顔を向け、それから右のハルミに顔を向け、そして前を見た。ゴールのネットから視線を上に移すと、青空があった。そしてその青は、聞き覚えのある音楽のようにしてわたしの記憶から何かを引きずり出そうと手を伸ばした。

あの日のアズール色が、同じアズール色がベールのようにして空をおおっている。

わたしはそのアズール色を瞳いっぱいにむさぼりながら、こう言った。

「お願いがあるんだ。きょう、わたしんちに来てくれない？ 相談したいことがあるんだ」

「わたしの家じゃだめ？ わたしの家だと、練習とかできるよ。ピアノの部屋は防音になってるし。アクアの話もしたいし」

すぐに返ってきたハルミの言葉に、わたしは少し腹が立った。

「だめ。わたしの家じゃないとだめなの」

小さなつむじ風が舞いあがって、わたしの頬に砂粒がぶつかった。

「いいよ、ヒナノの家に行くよ、ね、ハルミ？」

まるで小学生のようなソプラノで、オリエが初めて口を開いた。わたしの右隣でハルミがうなずいてから、「うん」と不満げに小さく答えた。

わたしは深くゆっくり息を吸いこみ、ため息のようにそれを一瞬で吐き出した。

空のアズール色はそのままだが、ゴールネットの向こうの男子たちはさつきよりもかげって見えた。

薄暗いままのリビングに座り込んで洗濯物をたたんでいたおかあさんに、今夜友だちが来ると告げると、驚いたように手を止めた。

「飲み物とか何にも出さなくていいから。部屋で話をするだけだし」

そう言うとおかあさんは何も答えず、また洗濯物をたたみ始めた。折り紙のように、辺と辺をぴたり合わせて、清潔な図形を作ることに静かに熱中する人のようだった。

ハルミとオリエは約束の時間よりも少し早く、ふたりそろってやってきた。

玄関で少しためらうように互いに互いに顔を見合わせ、ふたりはまるで不吉なものが家の奥にうごめいているかのよう、わたしの後ろに何度も視線をはわせて、そして意を決したよ

うにして靴を脱いだ。

廊下に沿っておとうさんの部屋、そしてわたしの部屋、そしてリビングルームがある。おとうさんの部屋の向かい側が寝室で、おかあさんはきつとそこで、ハルミとオリエが来たことを知りつつも、無力で横たわっているはずだった。

部屋に入るとふたりにベッドに座るようにうながし、わたしは勉強机を背にして椅子に腰掛けた。狭い部屋だから、わたしの膝とハルミの素肌の膝が触れそうで、わたしもハルミもそれをとて意識した。わたしは椅子ごと机に背中を押しつけた。

そのわたしの背中の方こう、机の上にウイジャ盤は置いてあった。オリエの目はすでにわたしではなく、ウイジャ盤をつかまえていた。

オリエが言った、あのソプラノで。

「かわいい。なに、それ？」

わたしは言った。

「ウイジャ盤。死んだ人と話す道具」

オリエは口を大きく開いて息を吸い、それでも足らないかのように瞳や鼻がふくらんで、それをぜんぶ隠そうとするかのように両手で顔をおおった。

ちょうどわたしの背中にウィジャ盤が隠れてよく見えなかったハルミは、からだをななめにして、汚れたものを目にするようなしなめ面で机の上をじっと見つめた。

わたしは顔が熱くなっていくのを感じた。

「おとうさんと話をするのよ、このウィジャ盤で。でも、ひとりじゃできないの。3人いないとできないの。おとうさんと話するには3人いないとできないの。カップを押さえる人と、メモする人と、3人いないと話せない」

わたしの顔はますます熱くなり、右目から、そして次に左目から、涙がわき出て頬をつたい、ジーンズの上に落ちてしまった。

恥ずかしさより驚きがまさった。なぜなら、おとうさんが死んでから初めて流した涙だったから。

唇はいつも呪いの言葉でふるえていた。涙の力で唇がふるえたのは、初めてだった。

手の甲で涙をぬぐうと、じっとわたしを見つめるハルミとオリエにもう一度言った。

「カップを押さえる人と、メモする人と、3人いないとおとうさんと話せない」

そしてわたしは、自分でも思いもよらなかったことだけど、何度も何度も頭を下げて、こう言い続けた。

「お願いします。お願いします。お願いします」

言葉をはくたびに涙は唇の端から口の中に帰ってきた。

「おとうさんと話をするのを手伝ってください。お願いします。お願いします」

わたしの声はそこで途切れた。わたしにできることは他に何もなかった。ずっと、ずっと、3人の息をする音だけが聞こえた。

するとオリエが深く息を吸って、そしてそれをゆっくり吐き出しながら、少しふるえるソプラノでこう言った。

「うん、手伝うよ、手伝うよ」

ハルミは頬をふくらませてうつむいた。

それからすぐに、ふたりは帰った。翌日、また会うことを約束して。

わたしがわたしであることを思いだして、そして目を開けると、ラジオから聞こえたのはボサノバみたいな音楽だった。それが終わると、交通情報が始まった。それが終わると、かんたんな天気予報があって、そしてまた、ラテンぽい曲がかかった。きのうのようにお

とうさんを暗示する言葉は何もなかった。

東向きのわたしの部屋には、すでに強く引き締まった夏の朝の光が何千本も何万本もカーテンの繊維越しに部屋の壁に突き刺さっていた。

ひとりで朝食をとり、それからおかあさんの財布から千円札を5枚抜き取ると、わたしは家を出た。

楽しくもなく、退屈ですらない授業が終わり、わたしは部屋へ向かった。

ノックしたドアを開けると、きのうと同じ顔ぶれの男子たちがいて、じっとわたしの顔を見つめた。目の奥がぐるぐる回るようなおいがした。タバコのおいだろうか。

ハルミたちがいないのを見たわたしは急いで頭を下げ、あとずさりするように部屋を出た。廊下に出てクラブ棟の入口に向かって戻ると、扉のガラスの向こうに陽に輝く校庭があり、その光の中をこちらに向かってやってくるオリエが見えた。

クラブ棟の扉を開けると、オリエが右手をあげてわたしの数歩手前で立ち止まった。

その数歩の距離をおいたまま、わたしはオリエに告げた。

「夜の8時に、わたしの家であって、きのう約束したとおりにしたいの。わたし、準備があるからもう帰るけど、ハルミに言っておいてほしいの。待ってるからって」

オリエは何度もうなずいた。

「わかってるの？」

頭を何度も上下に動かしてばかりで言葉がないオリエに胸がザラザラして、わたしの口調は思わず尖った。

オリエはそれでも何も言わず、しきりに笑みを浮かべて、何度もうなずいた。

それから電車でわたしは渋谷に行き、パチヨリの精油とティーカップを買った。リンダの文章に、パチヨリの香りで場を清めるようにと書いてあったからだ。

急におなかのすいたわたしはハンバーガーを食べ、そしてまた電車に乗った。冷房に肌がすくんだ。

高架を走る電車のドアの窓に頬を押しつけるようにして、外を眺める。7月の夕陽は東京を黄金色に包み込んでいる。美しいその光は、だけど無関心なのだ。人間の死や悲しみのことなど、光はちとも思わない。だから、等しく、ただ、光の粒子を振りまくのだ、王様のように、そうでなければ愚か者のように。

家に戻り、ドアを開けると、なつかしいにおいがたちこめていた。魚を焼くにおいだ。

おかあさんがキッチンで料理をしていた。わたしの顔を見ると、おかあさんははにかむ

ような目で言った。

「きのうは友達にお茶も出さなくてごめんね。夕ご飯、食べようよ、今作ってるから」
わたしの胸いっぱい敵意に似た感情が広がった。

「いらぬ。食べてきたし。それから、魚焼くの、やめてくれない？ くさい」

わたしはパチヨリの香りが、魚のにおいで台無しにされることが本心から心配だったし、おかあさんの宇宙への降伏を許すわけにはいかなかった。

おかあさんは何も言わず、シンクを見下ろすようにして、動きをとめた。ポプの前髪が垂れて、おかあさんの顔を隠した。

「泣くのはやめて。もうすぐ、友達も来るし」

わたしがそう言うと、おかあさんはコンロの火を止めた。

「そういう、怒るような言い方、やめて、ひなちゃん。おかあさんもギリギリなのよ」

「わたしだって、ギリギリ。母親のくせに、なんなの」

わたしはそう言って、回転している換気扇の強さを最大にした。

寢室のドアの閉まる音が聞こえた。

心に芽生えた暗いかたまりはますます固く大きくなった。

わたしはベランダに向かった窓を開け、魚のにおいを追い出そうとした。湿って不快な夏の空気が入れ替わりに嬉しそうにそわそわと侵入してきた。日は沈んだばかりで、空は赤紫から黒へとなだらかに傾いていた。

8時まであと1時間もなかった。わたしは部屋で準備を始めた。

ティーカップの包装をほどこき、パチヨリの精油の小瓶を箱から出した。段取りもすっかり頭に入れた。

でも、8時を10分過ぎても玄関のチャイムは鳴らなかった。ハルミたちに電話をしたかったが、ふたりが携帯を持っているかどうかも知らないことに気づいた。

それからまた10分がたった。わたしはベッドに横たわり、天井の空白を見つめながら、ハルミとオリエのふたりに向けて、言葉にならない怒りを、ため息とともに宙にふりまき続けた。

ついに、玄関のチャイムが鳴った。

玄関のドアを開けると、ハルミとオリエが立っていた。うつむいたまま、ハルミが「ごめん、遅れて」と言った。

わたしはほほえんだ。来てくれたのだ。

でも、ハルミとオリエは、わたしの部屋のわたしのベッドに並んで腰かけてからは無言で目を伏せたままだった。

手にしたパチヨリの精油の小瓶を見つめながら、わたしはきいた。

「どうしたの？ わたしのこと、ちっとも見ないじゃん」

ハルミの瞳がゆっくりわたしのようにやって来て、そして、小さな声でこう言った。

「ことわろうと思って来たんだ。ちょっと、手伝えないかもって、やっぱり」

心臓が熱くなった。

「なんで？ きのう、約束したじゃん」

ハルミは挑むように顔を上げた。

「だって、そんなの、できるわけないよ。死んだ人と話すなんて、できるわけないよ。だって、それって、コックリさんじゃん。たたりとか、そういうの、考えたことないの？」

指がしびれるようにふるえた。

「なんで、なんで、こわいの？」

ハルミは胸を張った。

「そういう迷信にわたしたちを巻きこむのはやめてほしい。ヒナノの気持ち、わかるけど、

もう、いいかげん、現実を受け容れたほうがいいよ」

オリエが小さくつぶやいた。

「こわいよ、こわいんだよ、こういうのって」

パチヨリの小瓶をわたしは床に投げつけた。

「こわくない！ こわくない！ おとうさんと話すのが、なんでこわいの！ 今話さないと、おとうさんとはもう二度と話せなくなるんだもん。おとうさんは遠くに行ってしまうんだ。今しかないんだ。今しか、今しか、今しか！」

わたしは見知らぬ獣のように叫んでいた。息苦しくなり、痙攣するようにして空気を吸った。のどが詰まり、わたしは机の上に突っ伏した。顔をのせた二の腕を涙がつつた。

静かだった。自分の息の音だけがすぐそばで聞こえた。あとは、静かだった。

今日も泣いた。二日連続だ。そう、思った。

誰も頼りにしないようにしよう、自分一人だけですべてをしよう、誰よりも強くなろうと、たぶん、そんなことをわたしは自分自身に誓った。

顔を上げ、手の甲と人差し指で交代交代で涙をふき、わたしはハルミとオリエに向き合った。

「帰って。帰って」

ふたりはじっとジュウタンに目を落とし、わたしにはふたりの頭の髪の様子が白い分け目だけが見えた。

「帰ろう」

わたしには髪分け目がそう言ったように思えた。それはハルミの頭だった。

オリエは返事をしなかった。

わたしは二つの頭に向かって言った。

「はやく帰ってよ」

オリエが何か言いたげに顔をあげ、でも、重力に負けてまた顔を伏せた。そのひれ伏すような姿勢のまま、オリエは奇妙なことを言った。

「この部屋にね、わたしたち以外の誰かがいるような気がする」

ハルミが小さく叫んで、両手で顔をおおった。わたしは驚いて振り向いた。うしろには机と壁しかなかった。わたしには何も見えず、何も感じられなかった。

「ねえ、おとうさん？ おとうさんがいるってこと？」

オリエにそうきいた。

「わからない。でも、わたしには感じるんだ、そういうの。時々、見えることもあるし」
オリエのその言葉を鵜呑みにしていいのだろうか？ オリエの目をわたしは見た。瞳は
かすかにおびえていた。

「誰かがいる」

もう一度そう告げたオリエの声に、わたしは愚かにも威厳すら感じた。

何が何でも、今このとき、ウィジャ盤を通じておとうさんと話をしなければと、思うよ
り早く体が動いていた。わたしは、ウィジャ盤を床の上に置き、ティーカップを逆さまに
してその上にのせた。床にころがっていたパチヨリの小瓶を拾い上げ、フタを開けて数滴、
ウィジャ盤の四隅にたらしした。香りが未知の色を帯びて立ち上がり、一つの力のようにし
て部屋中にある秩序を与えたように感じた。

顔をおおっていたハルミの両手をはがれ、足元のウィジャ盤を見つめていた。オリエは
うなだれたまま、両手でベッドのへりを握っていた。

「オリエ、ここに座って、お願い」

オリエはベッドから力無くズリ落ちるようにして、ウィジャ盤の一方の側に腰を落とし
た。わたしは、机の上からノートとボールペンをつかむとハルミに渡した。

「ハルミはただ書くだけでいいから。わたしが、AとかBとか言うから、それを書くだけでいいから」

ハルミは目を伏せたまま、不服そうに口をとがらした。

わたしは祈りを小声でゆっくりと口ずさんだ。それは、あのリンダの文書に記されているものだ。

「銀色の雨がわたしたちを清め、それは降り注ぐ光となり、わたしたちのからだを満たし、この空間を満たします。精霊に告げます。わたしたちの質問に答えてください」

わたしはティーカップの底にそっと手をのせると、オリエにも同じように手をそえるように目で伝えた。オリエの指がわたしの中指と薬指の上にためらいがちにのった。

わたしは天井を見上げ、こうたずねた。

「ここにいるのはおとうさんですか？」

そう、3度くりかえしてたずねた。

3度目の後に、ティーカップが動いた。

それはとても不思議な感覚だった。まるで誰かがわたしとオリエの指と手首に目に見えない糸をゆわえ、それを巧妙に気取られずになめらかに、思うがままに引くような、そんな

な感覚だった。わたしとオリエは思わず顔を見合わせた。胸がふるえた。だが、答にはがっかりした。

わたしとオリエが手をそえたティーカップは「NO」の単語を少し行き過ぎてから止まった。それは「NO」なのか、それとも「失敗」なのか、わたしは決めかねた。

わたしはもう一度きいた。

「おとうさん、いるの？」

息を3度した後、ティーカップがゆっくりと、まるであたりを見回し、自分の行くべき方角を一步一步確認しながら歩く昆虫のようにして、それは「NO」の位置から出発して弧を描くように動き、でもそれは引き返し、また「NO」を少しだけ行き過ぎて止まった。わたしはきいた。

「あなたは誰ですか？」

しばらくしてティーカップがまたしてもゆっくりと動き始め、ウィジャ盤のまん中あたりまで達すると一直線に引き返し、こんどこそはっきりと「NO」の上で止まった。

ティーカップが、まるで意思を持った昆虫のように動くその不思議さに惹かれながらも、理解できるメッセージがあらわれないことにわたしは少しいらだった。

オリエの指がわたしの指から離れた。わたしは驚いてティーカップから手を放して、そしてたぶん抗議するような目で、オリエを見た。

するとオリエはまたティーカップの底にだまって指をおいた。自分が直接にティーカップに触ったほうがよい結果が出るかもしれないと、そうオリエが考えたのだと、わたしにはすぐにわかった。

わたしは一瞬前の小さな怒りを後悔した。

オリエの指の上にわたしの指をのせ、わたしは深く息を吸った。パチヨリの香りがのどの奥に優しくからまった。

わたしは宙に向かって、もう一度たずねた。

「あなたは誰ですか？」

数秒のためらいの後に、ティーカップは迷うことなくウィジャ盤の右上を目指してすべり、ティーカップの持ち手はZの文字を指さして止まった。

「Z」

わたしは、そうつぶやくと顔を上げてハルミを見た。ハルミはあわててボールペンをこきざみに動かした。

ティーカップはZの位置から動かなかった。わたしはもう一度たずねた。

「あなたは誰ですか？」

ティーカップはこんどはすぐに動きだし、Eをさしてとまり、わたしは「E」とつぶやいた。それからまたすぐに動きだし、「R」を指した。

オリエが意図的に動かしているんじゃないだろうか。急にそんな気がした。

そんなわたしを置き去りにするようにティーカップはまた動きだし、最短距離を移動してもう一度「E」で止まると、動き出す気配がティーカップから消えたのがわたしにはわかった。

ハルミが抑揚なくささやくように言った。

「ゼ、レ」

意味を持っていそうな、たぶん名前かもしれない二つの音が初めて無の中からやって来たのに、わたしにはなぜか驚きは生まれなかった。

不思議な力ではなく、オリエがティーカップを動かしたのだという考えが頭から離れなくなったのだ。「ゼレ」という名前に強い違和感を感じたし、わたしの指はティーカップとともに動いたというよりも、ティーカップに引きずられていた。心の底でオリエはこの

ウィジャ盤の試みを軽蔑しているのかもしれない。さっさと終わって帰りたいから、わざとティーカップを動かしているのかもしれない。だとすれば、それはおとうさんに対する侮辱でもある。

ティーカップから指を放したわたしは、オリエの目を見た。はれぼったい一重まぶたの奥で、オリエの目の焦点がゆっくりとわたしにあうのがわかった。少し首をかしげて、それからオリエはこう言ったのだ。

「疑ってるんでしょ、わたしのこと？」

わたしはうなずき、こう言った。

「バカにしないでよ」

オリエのまぶたがふるえた。

オリエはあのソプラノで歌うように言った。

「だましてない。ほんと」

「じゃ、ゼレって何？」

「わたし、知るわけないし」

オリエの言葉に重ねるように、ベッドに腰かけているハルミの声が頭上から降ってきた。

「ヒナノ、それないじゃん。あたしもそうだけど、オリエだって、ほんとうはしたくもなかったこと、いましてるんだよ。それも、ヒナノの気持ちが変わるからだよ。さっき、帰ろうってしたら、帰れたんじゃない。だのにさ、オリエがあなたのおとうさんの霊がここにいるかもって言って、それでこうなったんでしょ。オリエがだますはずないじゃん。それにさ、オリエってさ、そんなコじゃないよ。ヒナノは知らないかもしれないけどさ」

わたしは、ふたりとわたしとの距離を感じた。そしてボーッと思った。親友というのは、ハルミとオリエのようなふたりのことを言うのだろうか。

ヒナノの言うことは正しいように思えた。

わたしはうつむき、Eを指したままのティーカップを見ていた。

オリエに謝ろうと思った、おとうさんのために、自分のために。もう少し、続けなければ、意味ある言葉を宙から引き出すまでは。

「ごめん。わたしが悪かった。ごめん。だから、もう一度、はじめから」

オリエはゆっくりうなずいた。ハルミの怒りを含んだため息が頭の上に降りかかった。

わたしはあらためてお祈りを捧げ、そしてここにいるのは誰かとたずねた。すると、やはり、ティーカップは「ゼレ」と答えた。わたしは混乱した。もちろん、ティーカップに

直接指をのせているのがオリエであったこと。でも、こんどは、わたしには引きずられて
いる感覚がなかったこと。むしろ、オリエの指とわたしの指がひとつになったような、奇
妙な感じを受けとったこと。それが、わたしをあわてさせた。

わたしは宙に向かって質問した。

「あなたの名前がゼレですか？」

オリエとわたしの指はすぐに反応した。昆虫が一目散に駆けていくようにして、ティ
ーカップは「YES」を屈指した。

「あなたはおとうさんですか？」

ティーカップは「NO」のまわりをゆっくりと一周して止まった。

「あなたは誰ですか？」

ティーカップはウィジャ盤の中央をめがけてゆっくり動いて「T」を指して止まり、そ
れから順番に7つのアルファベットを指した。そのたびに、こんどはハルミがそのアルファ
ベットを声に出し、ノートに書きつけた。

ハルミは少し考えてから、また小声で、そして突き放すように言った。

「ともだち」

オリエとわたしはハルミを見上げた。

ハルミが静かに繰り返した。

「T、O、M、O、D、A、T、I。ともだち」

わたしは、宙に向かった。

「あなたは、わたしのおとうさんを知ってますか？」

考え込むかのようにティーカップはしばらく動かないでいたが、やがてオリエとわたしの指をひきずるようにして、次々とアルファベットを指し示していった。

動きが静まると、ハルミがつぶやいた。

「か、れ、は、と、け、た」

「彼は溶けた」ということ？ いったい、どういう意味なのだろう？ おとうさんは火葬場で焼かれ、そして溶けて無くなってしまった。そういうことを言いたいのだろうか？ わたしは胸の奥で拡がり始めた怒りに似た闇を感じながら、問い返した。

「おとうさんは溶けていなくなったということですか？」

ウィジャ盤は答えた。ゆっくりと、ゆっくりと、音のひとつひとつを指さして。ハルミがそれを実際の音に変えた。

「か、れ、は、と、け、て、そ、し、て、い、る」

おとうさんは溶けて、そしている……。

「意味がぜんぜんわからない、もつとわかるように教えてください」

はき出すように言うと、私の指とオリエの指を引きずるようにして、ティーカップはまたウィジャ盤の上を歩き出した。

「か、れ、は、こ、こ、に、い、る。ど、う、じ、に、か、れ、は、い、な、い、も、ど、う、ぜ、ん、だ」

彼はここにいる。同時に彼はいないも同然だ——ということ？

わたしはゼレと名のるこの姿のない回答者が、ほんとうにおとうさんのことを知っているのか聞いただそうと思った。ゼレは、たんにわたしたちを煙に巻いて喜んで、あのリンドアが言っていたような、いたずら者の低級霊かもしれないのだ。

「ゼレ、ききたいことがあります。私のおとうさんの誕生日はいつ？」

少し考え込んでから、ティーカップは思い出したかのようにきびきびと数字を指し示した。

ハルミが言った。

「2、9、5、4……29年の5月4日？」

もちろん違う。

「ううん、1954年の2月9日……」

そうわたしが言うと、ハルミはぶるつと体を震わせた。

でも、誕生日ぐらい低級霊でも知ることができるかもしれないからと、わたしはもう一つの質問をした。

「おとうさんはどんな人でしたか？」

一瞬の間の後に、ティーカップはゆっくりと、そしてたくさんの文字を指し示していった。

ティーカップの動きがやむと、ハルミはローマ字の列を一生懸命になって日本語に置きかえていった。

「うそをたくさんついた。えをかいだ。えをかいだかかった。おまえのしらないへやでえをかいだ。おまえのはおやがしらないへやでえをかいだ。おまえがいちばんだじだつた。おまえをもっともあいたい」

胸の膈は重い振動となって体中で波打ち、わたしはまた涙をこぼした。涙の粒はウィジャ

盤に落ち、安っぽいクレオパトラの絵を濡らした。

オリエはティーカップの上のわたしの指の下から自分の手をそっと引き抜いた。

わたしもティーカップから手を放すと、その手で顔をおおった。手のひらが涙でぬれていった。涙は止まらず、腕をつたって、ひじからポトポトとジーンズやじゅうたんの上に落ちた。

オリエが宙に向けてゆっくりと語りかけた。

「また、あした、会ってください。お願いします。ありがとうございます。お帰りください。どうぞお帰りください。ほんとうに、ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございました」

オリエが何もない宙に向かって、何度も何度も頭を下げるのを、わたしは気配で知った。オリエとハルミは、わたしの涙が流れるのをやめるまで、何も語らず、ただじっとそこにいた。それは、なにかしら、こわばった二つの枕のような感じだった……。

翌日の夜の8時。はっきりと約束したわけでもないのに、玄関のチャイムが鳴り、ドアを開けるとオリエとハルミがそこに立っていた。きのうとちがって、わたしの顔を見るとふたりはかすかに唇を引き上げ、笑みをつくった。

わたしの部屋に入り、ベッドの上に座ると、ハルミがきいた。

「おかあさんはどこにいるの？」

「部屋にいる。玄関を入れてすぐのところの。だから、ハルミとオリエが来たの、わかっているはずだよ」

「働いてるの？」

「働いてない。ずっとここにいます。なんにもしないで」

「お金とか、大丈夫なの？」

「知らない」

そういえば、お金はどうしてるのだろう？ 初めて、そんなことを思った。おかあさんは、この家を、これからどうするつもりでいるのだろう？ 何か計画があるのだろうか？

それとも、部屋に閉じこもっているように、未来からも閉じこもっているのだろうか？

食事をいっしょにするわけでもなく、姿を見ない日もあり、トイレやバスルームに入る気配だけで、おかあさんがいることを当たり前のことのように確認してきた。そんな生活が、もう二ヶ月近くも続いていたことに、おぼろに気づいた。でも、だからといって、特別な感情が芽生えたわけでもなかった。ノートにメモするような、ただそんな感じだった。わたしがウィジャ盤を床にひろげると、ハルミがまた口を開いた。

「あのさ、部でキャンプに行くんだけど、行ける？ 7月の25日から3日間。最後の夜は発表会。場合によってはアクア初のライブとなるわけなのだけどさ」
いらついた。

「今さ、そんなこと、考える余裕ないよ」

ハルミは口をすぼめた。ベッドに座っていてすら、頭一つ分はオリエより背が高い。そんなハルミの長身が、とりわけ蛍光スタンドみたいの前屈みに長く伸びた首と小さな頭が、わたしには鈍重さの証しに思えた。

ハルミを遠くに感じた。わたしはハルミとオリエを利用しているのだということを、そのとき、はっきりと意識した。でも、それに後ろめたさは感じなかった。わたしは、ただ、

ウィジャ盤が、不思議なトランシーバーやラジオのように、おとうさんの声を、考えを、感情を、わたしに伝えてくれただけでいいのだ。そのためには手段を選ばないのだ。

わたしはおとうさんの聴く音楽に同じようにひたろうと努力し、おとうさんの読む本の難解さにあこがれた。おとうさんこそが物差しだった。社会の形を測る目盛りをもつ、目に見えない、硬い硬い三角定規だった。

だけどおかあさんは、おかあさんはただの弱虫だ。昔から、そうだ。

わたしが小学2年のときのことだったと思う。おとうさんが長い間、家を留守にしたことがあった。そのときのおかあさんはやっぱり今のよう泣き暮らした。わたしの食事もつくることができず、小学2年のわたしはお菓子を自分で朝食がわりに食べて登校したのだ、何日も。同じ洋服を着て。

今も、あのときと同じだ。

だのに、おかあさんはわたしをよくこう言って怒った。『一人っ子だから、あなたはわがままで。兄弟をつくってあげばよかった』。

そうかもしれない。ハルミも今、きっとそう思っているだろう、ヒナノはわがままで、

自己中だ、他人の善意や同情は利用するものと考えているんだと。ねえ、ハルミ。そのどこがいけないの？

わたしはティーカップをウィジャ盤のかたわらに置き、パチヨリの小瓶のキャップを回した。あらゆるものが整列してしまうような、あの独特の香りがそつと頭の内側に滑り込んできた。その瞬間、わたしはきょうのことを別なかたちで思い起こした。別なかたちというのは、忘れていたことに気づいたような、そんな新しい感情がわき上がったということだ。

ゼレと名のつた者は誰なのだろう？　そして、オリエが嘘をついていないのだとしたら、きょう、わたしたちが体験したことというのは、何なんだろう？　何が起こったのだろう？　ほんとうに起こったことなのだとしたら、「ほんとう」とはなんなのだろう？

わたしはそんな思いにとらわれ、パチヨリの小瓶のキャップを右手でつまんだまま、ハルミの声がするまで、考えごとの渦巻きの中でくるくる回った。

「ヒナノ」

オリエが自分からすすんでウィジャ盤の前に、私と並ぶようにして横座りに座った。わたしはあぐらをかいて、パチヨリの小瓶から注意深く精油を数滴、ウィジャ盤の四隅にた

らした。

心が木目正しくなるような香りがウイジャ盤からあらためてわきたった。

わたしは祈りの文句を唱え、そして、ティーカップに手をそえた。相談したわけでもないのに、自然とオリエがじかにティーカップの底に指をのせ、その上に私の指がのった。オリエの冷たい指がびくつとふるえた。

わたしは、きのうの出来事をもう一度確かめたかった。ゼレというのが名前なのか、もしそうなら、誰なのか。そして、何よりも、おとうさんが溶けたというのはどういふことなのか。

わたしは宙に向かって、空気と空気のすき間に言葉をそつと差し込むようにこう言った。「ゼレ。来てください。きのうのゼレ。ここに来てください」

しばらく待っても、オリエの手も、わたしの手も、まったく動かなかった。もう一度、空気の中に向かってささやいた。

「ゼレ。来てください。お願いします」

何かが動いた。気がつけば、それはわたしの手とオリエの手だった。

ティーカップの柄がアルファベットをゆっくり、ひとつずつ、几帳面に指さしていった。

鉛筆でノートにそれを記録していたハルミが、小さなかすれた声で言った。

「ゼレ」

それは名前なのだろうか？ わたしはたずねた。

「ゼレというのは名前ですか？」

ティーカップはまたしてものろまの昆虫のようにしてYESを目指して止まった。

「あなたは誰ですか？」

アルファベット8文字を指してティーカップは静かになった。ハルミが言う前に、答はわかった。きのうと同じ、トモダチ、だ。

わたしはきいた。

「あなたは人間ですか？」

ティーカップはNOを目指した。

「あなたはどのような存在ですか？」

すると、ティーカップは理解できない言葉を伝えて静まった。

ハルミが言った。

「キオク」

キオクって、「記憶」のこと？

「キオクって、あの、覚えたり、思い出したりする、あのキオクのことですか？」
ティーカップはYESを指さした。

「じゃあ、誰のキオクなんですか？」

ティーカップは複雑に動きまわった。

ハルミが言った。

「ニンゲンノキオク……クウキノキオク……ホシノキオク……」

人間の記憶、空気の記憶、星の記憶。そう言っているのだろうか。

「もっとわかるように教えてください」

その私の言葉が終わる前に、ティーカップが動いた。ゼレはこう告げた。

「オマエノキオク」

私は混乱した。リンダの文書に書いてあった、悪戯好きなアストラル存在のことをふと思い出した。低い次元にとどまっている存在のことだ。ゼレは、そんな低次元の存在かもしれない。わたしたちを混乱させてただ喜んでるだけなのかもしれない。どうすればいいのだろうか？

わたしはたずねた。

「わたしの記憶なら、わたしがおとうさんのことをどう思っていたか……たとえば、中学1年生のとき、どう思っていたか、わかりますか？」

言い終えて後、わたしの胸が何度か上下してから、ティーカップは動いた。たくさんのアルファベットを指さし、行ったり来たりし、ときどき考え込むかのように無為な円を描き、また一直線にウィジャ盤の端から端へと横断したかと思うと、やがてジグザグに移動し、そして、ようやく静かになった。

ハルミがゼレの言葉を読みあげる。

「オマエハ オトウサンヲニクンダ ニューガクシキニ コナカッタカラ オトウサンハ
ズット イエニイナカタタ オマエハサビシカタタ オカアサンノセイダト オマエハカ
ンガエタ ソシテ オカアサンヲニクンダ」

わたしの指がオリエの指から離れた。

わたしは思い出していた。

体育館で後ろをぐるりと見れば、遠くに笑顔のおかあさんと祖母の顔だけがあった。そのどちらかの横にいるはずの、おとうさんの顔はなかった。わたしは大きな不安に襲われ

た。なぜなら、おとうさんは、入学式に行くことと私と約束していたからだ。だが、おとうさんは約束を破った。それどころか、それから1週間も、電話もなんにもなく、家を留守にした。

忘れていた。思い出したくなかったのだと思う。

ゼレは正しいことを言っていたのだ。

「ヒナノ、どうなの？」

ハルミの声がベッドから、つまりわたしの頭のとっぺんのほうからした。わたしは無視した。

とすれば、ゼレはわたしの単なる記憶でしかないのだろうか。つまり、わたしの無意識が、ゼレという人格をまとって、まるで他人のふりをして、おしゃべりしているだけなのだろうか？ だましているのはオリエではなく、わたし自身が、わたしの無意識が、わたしをだましているということなのだろうか？

わたしは、そのことを確かめるためのいい質問を思いついた。

「じゃあ、あのととき、おとうさんはどこにいたのですか？ 入学式に来なかったあとの1週間は？」

長い時間をかけて、ウィジャ盤の上をティーカップは動きまわり、ようやくのこと、ゼレはこう答えた。

「オマエノシラナイ オンナト エヲカク タビニ デタ」

突然、ゼレが汚らしい存在に変わり、薄ら笑いを浮かべているように思えた。怒りがこみ上げて、わたしは、まるで現実の人間に向かってそうするように、食ってかかった。

「証拠あるの？」

ゼレはゆっくりと、のろのろと、答えた。

「ハハオヤニ キケ」

ハルミはそうゼレの言葉を代弁してから、こうつぶやいた。

「浮気してんだ」

わたしは立ち上がり、ハルミをにらんだ。ハルミを消しゴムで消すように、否定したかった。でも、ハルミは消えずに、ただ、下を向いて、ごめんと謝った。

わたしは座りなおすと、ティーカップに指をおこうとした。だが、そこにはオリエの指がなく、オリエを見れば、首をかしげ、わたしをみて微笑んだ。その意味が、わたしにはわからなかった。ただ、突然、いつも言葉を押しやって、わざとらしく微笑んで、そして

瞳ははれぼったい一重まぶたの奥にしまい込む、そのオリエのやり方が気にさわった。

オリエはずっと首を右肩の側にかたむけて、わたしの言葉を待っているふうだった。

わたしは言った。

「何がおかしいの。ブス」

首をかしげたままで、ほほえみだけが消えた。

「やっぱ、帰ろ」

ハルミがオリエに言う。「やっぱ」という言葉に、わたしは悟った。

「来る気、なかったんだ、最初から」

わたしがそういうと、ハルミは黙ったまま、立ち上がり、オリエを見つめた。

オリエは灰色の石のようにして、じっと動かなかった。

「やってらんないよ。帰ろ、オリエ。こんなヤツにさ、親切することないよ。言ったとお
りじゃん、自分のことしか考えてないんだよ。帰ろ、オリエ」

ハルミはドアの前まで歩いた。でも、オリエはうつむいたまま、動こうともせず、わた
しの隣に座っていた。

オリエが口を開いた。

「だめだよ、ゼレ、まだここにいるんだよ。ちゃんと、お見送りしないと、たいへんなことになるんだから。ちゃんと、帰そう、ちゃんと」

ハルミが口を尖らせてドアのところから戻り、半袖から伸びたオリエの真つ白な二の腕をつかんだ。

「そんなの迷信だよ。帰ろ、早く」

ハルミはそう言うと、二の腕を引っばってオリエを立ち上がらせようとした。だが、オリエは抵抗した。だだをこねる子供のように、体にたくさんの目に見えない重りをぶらさげて、お尻をべたんと床につき、手のひらを吸盤のようにして床にあてた。

ハルミはカマキリみたいに腰をおり、オリエの腕をなんども引っばった。

「帰ろ、帰ろ」

オリエは首を激しく振って、「ダメだよ、ダメだよ」と小さなソプラノで繰り返した。

わたしは驚いた。

オリエはハルミの手を振りきると、こう叫んだ。

「死んだ子がいるんだよ、ちゃんと帰さなかったから、わたしの友達が、わたしの親友が、死んだんだよ、コックリさんで」

オリエはそう言い終わると息を止めてうつむいた。ハルミはオリエの顔をのぞき込んだ。「ほんとうだよ、死んだんだ、ちゃんと帰さなかったから」

こんどはささやくように言うのと、オリエは顔を上げてハルミを見た。

「コックリさんしてて、ちゃんと帰さないで、ふざけてやめたら、その子、自殺したんだ」ハルミがたずねた。

「いつ？」

「小学6年のとき」

「誰？」

オリエは答えずに下を向いた。

一瞬でハルミは考えをまとめたようだった。ベッドの上に座り直すと、オリエに言った。

「じゃ、帰して、ゼレを」

オリエはうなずくと、わたしを見た。

「ゼレを帰すから、ヒナノもちゃんとお礼を言ってね？」

わたしは顔をそむけた。わたしは怖くはなかった。オリエはもう一度、「ちゃんとお礼を言ってね」とわたしに言い、それからハルミにも同じことを言った。

わたしはうつむいて下を向き、頭の中では、新しいオリエとハルミを探すことはとつてもたいへんなことだけど、オリエとハルミに謝るくらいなら、むりやり新しい友達をつくるほうがいい、でも、友達を作るには時間がかかる、一人でできるウィジャ盤はないのだろうか、などと、考えの切れ切れが浮かんでグルグルと回転しては消えたり、そのまま止まったり、姿を変えたりした。

オリエがゼレにお礼を言い始め、「ゼレ、お帰りください」と、あのわざとらしいソプラノで言い、そしてそのあとに、何と言おうとしたのだろうか、「ほんじ」と音にしたその直後に、パチンと何かが割れる音がして、同時にハルミの大きな叫び声がわたしの耳とからだをブルツと震わせ、わたしの目は反射的に音がしたほう、オリエのほうを見た。そこには、ベッドがあり、その後ろには壁しかなかった。見る前からそれはわかっていて、そこに誰かが割ることができるガラスやプラスチックなんてないことを。

ハルミは立ったまま、あちこちに視線をはわせた。

わたしもまわりを急いで点検したけれど、砕けたガラスの輝きや、部屋にある物たちに異変を見つけることはできなかった。

ハルミもきつと同じだった。あの、何かが割れる音が、ハルミ一人の幻だと、ハルミも

思っていない。なぜなら、わたしも、オリエも、その音の源を探していたからだし、だからこそ、ハルミの恐怖は沸騰するお湯のように、グルグル対流しては、別の何かへと姿を変えていったのだ。

ハルミはあらためて、叫んだ。恐れをふりはらおうと、肺の中の空気をのどが裂けそうなほどの音に変えて噴き出した。

部屋のドアがたたかれて、遠慮がちに開いた。ハルミは振り向きながら、残り少なくなつた肺の中の最後の空気を、その開いたドアに向けてかすれた叫びとしてぶつけた。でも、その叫びが指し示した先に現れたのはパジャマ姿のやせこけたおかあさんだった。

「ごめんね、大丈夫？」

おかあさんがささやくように言った。ハルミが安堵と恥ずかしさで顔を真っ赤にしてるのが、わたしにはわかった。

「大きな声が聞こえたから。ヒナノ、大丈夫？」

思うより先に言葉が出た。

「出てってよ。関係ないじゃん」

あわてたようすでハルミが言った。

「あ、大丈夫です。すみません。大丈夫ですから。今ですね、みんな、あのう、ヒナノのお父様の霊を呼ぼうとしてたんです。あのう、ヒナノが天国のお父様と話したいというものですから、えっと、えっと、ご心配なく」

そう言っておかあさんに微笑んでいるのが、背中越しだけど、私にはわかった。わたしは怒りにのがが詰まった。ハルミは愚かだ。バカだ。お調子者だ。ただの機械だ。

わたしはおかあさんの表情をうかがった。そこには予測したような驚きや困惑は生まれなかった。そして、なぜか微笑みを浮かべながらこう言ったのだ。

「そう。ヒナノはおとうさんとあまり話したことがなかったからね。おとうさんは忙しくてあまり家にいなかったし。話せるといいね」

それから、おかあさんは微笑みをたたんで頬の裏側にしまうと、そろそろ解散しなさいと、亡霊のような声音で言い残してドアを閉めた。

オリエのソプラノが虫の羽音のようにして耳に聞こえてきた。

「まだ、ちゃんと帰してないから、帰そうね。ハルミもヒナノも、もう一度、お礼を言っ
てね、ゼレに」

突然に、わたしの頭の中に学校の美術室に飾ってあった安っぽいエッシャーの絵が浮か

んだ。登っても登っても元に戻ってしまふ、あり得ない階段。永遠に坂道が続く円周。わたしはその中にいると、思った。おとうさんのいる死という空間に向かって登っても登っても、わたしは、登っていないのだ。

オリエが何かをわたしに言うのに気づいて顔を上げると、オリエが嬉しそうにわたしの背後を右手の小指で指すようにして言った。

「ゼレ、そこにいたと思う、たぶん。わたし、感じるの、時々」

ハルミを見れば、オリエに視線がネバネバとはりついたままで、立っていた。

わたしはオリエが嘘をついていると確信していた。ますますオリエのことが、うとましく思えた。

わたしに追い出されるようにして、そして、オリエとハルミは帰っていった。

沈黙。なんの音もしない。

部屋でひとり、考えた。

わたしは……要するに……誰なんだろう？

それからしばらくして、地獄のように無為な夏休みが始まった。

私の家はどんどん汚れ、腐り始めていた。

一日中家にいて、おかあさんは神経質に片づけばかりしていたから、ジュウタンの上にゴミ一つ落ちてはいなかったし、キッチンだって洗剤の嘘くさいオレンジ臭の他はどんな臭いもしなかった。それでも、私には家がどんどん汚れていくのが見えた。

目をつむれば、クリーム色の壁のクロスに真っ黒な染みが点々と浮かび上がるように感じたし、キッチンからは無いはずのむせるような生ゴミの臭いが漂ってきた。

なぜだかは知らない。

でも、そうなのだ。目をつむれば、生き物のように増えていく汚れが見え、腐ったものの臭いがしたのだ。

それはおとうさんの死がもたらしたものに違いはなかったけれど、おとうさんがもたら

したものではないことは、だんだんとわかってきた。それは、おとうさんがいなくなったことで見えるようになってきた何かのせいだった。

もともとほっそりしとしていたおかあさんだったけれど、今や病人のようにやせてしまった。若々しい弾力でいっぱいだったボブの髪型も、このごろは弱々しく、ペタンと頭蓋骨に張り付いているだけだった。優雅にカールした睫毛は変わらなかつたけれど、それを支えるまぶたは眼球が透けて見えるほどに薄く、くぼんでいた。腕や足には、まるでタトゥーを入れたように、血管が青黒く浮き出ていた。

わたしは時々こう思った。おかあさんは、何もしないことによって、このままやせて、そして、ゼロになってしまおうと思っているのではないかと。

おかあさんにとってもわたしにとっても、魚が一匹もない死んだような池で、何を待っているのかもはやわからずに、ただ釣り糸を垂れて、干からびたミイラのように永遠の暇をつぶしているような、そんな日々を繰り返していた頃だった……。

集金に來た新聞店の人以外に押されることのなかつたチャイムが久しぶりになった。わ

たしはその音を無視した。

2度目のチャイムが鳴ったあとしばらくして、おかあさんの私を呼ぶ声が聞こえた。そこに、オリエという音が混じっていたことに、わたしは驚いた。

ドアを開け、廊下に出ると、確かに玄関ではオリエが首をかしげて微笑んで立っていた。私も首をかしげた。なぜ、オリエがひとりで、ハルミを伴わずにそこにいるのか、まるで夢の中でナンセンスなシーンを見ているように、不思議でたまらなかった。

おかあさんにうながされて、オリエは靴を脱いで上がると、私に向かって数歩歩いた。私はドアを開けたまま部屋に戻ると、オリエが続いてドアをていねいに音を立てずに閉めた。

オリエはベッドの上に勝手に座ると、わたしを見て微笑み、そして鼻を中心にして時計回りに小首をかしげた。

「やめてくんない、そんなふうに笑うの」

そう言うと、オリエはしおれる雑草のようにして、たちまちにうつむいた。

「なんの用なの？」

わたしがきくと、下を向いたままオリエは答えた。

「ゼレに会いたくなって思っ」

マイナス×マイナスはプラスだから、嘘が嘘を生み出せば、それは本当になるのだろうか。オリエはなんのために嘘を本当だと言い張らなくてはならないんだろう？

「ゼレなんて、オリエの嘘でしょ。ほんとは、見えなかったし、ティーカップだって、勝手に動いているようにして、ほんとはオリエが動かしてたんですよ。それなのに、なんて言えるわけ、ゼレに会いたくないなんてさ。いいかげんにしてよ。ふざけないですよ」

オリエの頭がバネ仕掛けのようにはね上がり、わたしを見つめた。

「嘘ついてないし、ぜんぜん。ほんとうにゼレ、いたし。ヒナノだって、信じてたじゃない。なんでさあ、わたしが嘘つかなきゃいけないの。ひどいよ」

オリエの一重まぶたの奥で、小さい瞳が潤んでいるのがわかった。

「ゼレが見えたって、証拠はどこにもないじゃない」

わたしはそれでもオリエに嘘だったと白状させようと考えていた。

終業式があった日の帰り道、わたしはあることに気づいた。駅へと続く商店街の一角にある小さな喫茶店の名が「ゼーレ」だということ。暗く陰気なたたずまいのその喫茶店には入ったこともなかったし、興味を持って見つめたこともなかった。でも、その喫茶店

の名がわたしやオリエの心の奥底にゴミのように漂っていて、あのウィジャ盤の上にぶつかりと浮かび上がってきたのだと、わたしは確信した。

ゼレなんていない。心霊術なんて嘘っぱちだ。なにもかもが偶然で、なにもかもが無意識がつくりあげたお芝居なんだ。リンダという女性の書いた文章だって想像に過ぎない。だって、証拠がないのだから。

わたしは、ノドが焼けそうにながらも、その事実を飲み込もうとし始めていたときだったのだ。

オリエは言った。

「見えたのはわたしで、ヒナノじゃないんだから、証拠なんてないもん。わたしのことを信じるか、信じないかだけで、証拠なんて、いらない」

「じゃあ、わたしは信じない」

オリエは膝の上で握りこぶしをつくると、胸をふくらませ、そして、こう言った。

「じゃ、さ、あの音は？ ガラスが割れるみたいな音がしたでしょ。あれは何？ ハルミも聞いたし、ヒナノだって聞いたでしょ。あれは何？」

わたしは言った。

「そんな音、しなかったよ。したっけ？」

そして、思わず、うつむいた。

オリエの呼吸の音が、わたしの息の音と重なった。家は静かだった。

オリエは背中を深く折りたたみ、そろえた膝の上に顔をのせた。それから、ゆっくり顔を上げると、わたしを見つめながら立ち上がり、握りこぶしを腰の横で振った。

「ゼレはいるよ」

オリエはそう、叫んだ。はじめて、わたしはオリエが怒るのを見た。

「そいでさ、そいでさ」

あえぐようにそう言葉をつなげると、オリエは大きく息を吸って、それを一息で吐き出しながらこう言った。

「中学のあなたの入学式の話は、あれもわたしの嘘なわけ？」

すぐにオリエは「ごめんね」という意外な一言をあわてたように口にして、それからわたしに背を向けた。

オリエは部屋を出ていき、それから玄関のドアが閉まる音が聞こえた。

急に蝉が鳴き出した。まるでわたしの脳の内側でそれがもがいているようで、いらだつ

振動音にわたしの心臓は怒った。

両手で耳をふさいでも、蝉の音はわたしを追いかけた。

突然、蝉が鳴き止んだ。

わたしは窓を開けた。熱く湿った空気がだらしなく入り込んできて、わたしの顔をなでまわした。

何もすることが無く、何の予定も無く、何の希望も無い。

最後にオリエがわたしの部屋のドアを閉めて帰った日から、そしてまた今日、オリエがわたしの部屋のドアを後ろ手で閉めるまでの数週間、わたしは何もしなかった。おかあさんもまた何もしなかった。何もしないということは、ただ、コピー機から同じ一日が何枚も何枚も吐き出されたようなものだ。

でも、いったい、しなくてはいけない何かなんてあっただろうか？ コンビニに行ってお弁当を買うこと、そしてそれをレンジで温めて食べることに。それ以外に何か生きるためにしなくてはいけないことは見つからなかった。

確におかあさんは神経質に掃除を繰り返し、洗濯をした。でも、ベランダにはいつも、数枚の下着が干されていただけだ。

夜、おかあさんはお酒を飲むようになった。冷蔵庫の脇にワインの空きビンがきちんと並んでいた。それは月曜日になると無くなり、また1日1本ずつ増えていく。

わたしもおかあさんも、何か、つかまるものが必要だった。違う場所、たとえば未来のようなものへと通じるドアの取っ手のようなもの、ドアノブのようなものが必要だった。

それがなければ、このまま、生ゴミみたいに腐ってしまうしかないのだ。

でも、どこにそんなドアノブがあるんだろう？　もしかしたら、最初からドアノブなんてないのかもしれない。ドアノブがあるふりをして、あるんだと思い込んで、思い込む振りをして、誰もが生きているのかもしれない。

そんなふうに思うことも多くなった。

それならば、生きていたって、死んでいたって同じだ。もし、死が眠っているようなものだとしたら、死も悪くはない。何も考えず、何も感じず、ただひたすら無であること。それは別に怖くはない。だって、それは夜ごとの眠りで経験済みではないか。

でも、その答には何か微妙に違和感を感じるのだ。死を眠ることと同じだと考えることの裏には、そのうちに死から目覚めるはずだということを知らないうちに前提にしているような気がしたのだ。死から目覚めることがあるなら、死も眠りと変わらない。でも、死

は眠りではない。絶対に。なぜなら、おとうさんが死から目覚めることがないことは、地球が、月が、太陽が、宇宙があることと同じ固さを持った、はっきりとした事実だからだ。だから、だから、だから……。

だから？

固く丸い何か、そう、味のない葉のような何かが、わたしの頭の中を流れていくのを感じた。それは鼻を通ってのどにつまり、そして、わたしにつまみ取られてのどから出され、そしてわたしに見られるのを待っているような、そんな気分がした。それは、なんなんだろう？

わたしは、せき払いを試してみた。もちろん、その固い丸いものは、わたしの気分の中にはしかないものだから、のどからそれが飛び出すことなんてない。でも、せき払いせずにはいられなかったのだ。

わたしは窓の外に広がる東京を見た。

くすんだ緑の丘の向こうに、青とグレイの何億個の木くずみたいにして、それはずっとずっと向こうまで散らばっていた。

そのとき、また、玄関のチャイムが鳴った。

わたしは機械のように立ち上がり、部屋を出た。なぜか、わたしの気分は少しだけ穏やかだった。

いつもならドアスコープから外に誰がいるのかをのぞいて確かめるのに、そのときはそんなことも忘れて玄関のドアを開けた。

ドアを押すと、そこから夏の光の反射が熱気とともにくらくらと射し込んで、そしてその光を背にして立っていたのは、さっき飛び出していったばかりのオリエだった。

オリエはわたしを見ると、通路に立ったまままでおじぎをした。一回、二回、三回、おじぎをした。頭をさげた。それから、あのソプラノで、こう言った。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

夢を見ているようだった。いまこの目の前のオリエが夢か、さっきのオリエが夢か、どちらかが夢だったのかもしれないけれど、わたしにはどっちかを夢と決める気力もなく、気がつくとも、わたしはバカみたいに首をたてに振って何度もうなずいていた。

オリエが言った。

「ゼレと話させてください。お願いします」

オリエは頭を下げた。オリエの髪の毛が揺れながら落ちて、オリエのヒザのあたりで振

り子のように左右に揺れた。

わたしが信じていないゼレを、オリエは本気で信じているのだ。それならゼレに会わせてあげようと、わたしはぼんやり思った。心の中に意地悪な気持ちは見つからなかった。

わたしは「いいよ」と言うと、ドアを大きく押し開けた。さらにたくさんの夏の光の粒子たちが、オリエといっしょに家の中にどっと入ってきた。ドアが閉まったあとも、玄関は明るいままのような気がした。

わたしは部屋に入ると、窓を閉め、リモコンでエアコンのスイッチをオンにした。それからオリエに背中を向けるようにして机に向かい、椅子に座った。ウィジャ盤は机の一番下の引き出しにしまっていた。わたしはかがみこむようにして引き出しを開け、ウィジャ盤を取り出すと、椅子ごとくるとまわって振り向いた。オリエは部屋のドアを背に、うつむきながら立っていた。

「座れば」

そう言うと、オリエはベッドの端にそっと腰をおろし、うつむいた。

「でも、ゼレなんて、いないよ」

わたしは頭をたれているオリエの白いつむじに向かってそう言った。

「わたしたちの無意識がさ、いたずらしているだけなんだよ。わたし、わかったんだ。だからね、もう、おとうさんのこと、あきらめた」

膝の上のウィジャ盤が、安っぽいゲーム盤に見えた。

オリエがうつむいたまま、言った。ゆっくり、確かに、そしてあの小さなソプラノで。

「あきらめないほうが、いいよ」

「なんで？」

「不思議なことって、ほんとうにあるんだもん。霊って、いるし。わたし、ときどき、見るし」

わたしはオリエを部屋に入れたことを後悔し始めた。

「オリエってさ、よくさ、そんなウソを平気で言えるね。わたしがさ、おとうさんのことをさ、どんなにさ、どんなにさ」

そこまで言うと、その先の言葉は胸のどこかをグルグル回り続けるばかりで、わたしはそれを口から取り出すことができなかった。

わたしはウィジャ盤をベッドの上に放り投げると、椅子ごとくると回転してオリエに背を向け、机の上で組んだ腕の上に右の頬をそっと置いた。左を向いたわたしの目には本

棚が見えた。わたしは目をつむった。オレンジや茶色や黒の模様が万華鏡のように、まぶたの裏でグルグル回った。

電車の発車を告げる駅のホームの電子音がかすかに聞こえた。駅の音がここまで聞こえるなんて知らなかった。

それから、オリエが息をするたびに、息がオリエの鼻の何かをこする、小さな規則的な音も聞こえてきた。それはまるで小動物の寝息のようだった。昔飼っていたモルモットを思い出した。たった一年で死んでしまった彼を、わたしとおかあさんは小学校の裏山に埋めた。わたしはモルモットの硬くなってしまった死体をこわくて触ることができなかった。だから、おかあさんが古いタオルでくるんで紙袋に入れて小学校まで運び、そして埋めたのだ。

わたしはふと、そのオリエの息の音のリズムが止まったことに気づいた。わたしは目を閉じたまま、ごく自然にオリエの息の、次の音を待った。でも、フェルマータで延ばされた休符のように、次の音はなかなか聞こえてこなかった。

わたしが、もしかしたらもうオリエはこの部屋にはいないのだろうかと思いはじめたそのとき、ようやくオリエが息を大きく吸い込む音がして、そして、オリエはこう言ったの

だ。

「聞いてください。お願い。聞いてください」

わたしは黙ったまま、腕の上にこんどは左の頬をのせた。

「なんでゼレと話したいのかを言うから、聞いてください。お願いします」

わたしは、腕の上に額をのせた。まぶたの裏の万華鏡は、グレーと黒の色だけの模様に変わった。

オリエは勝手に語り始めた。

そしてわたしの心はいつの間にかオリエの言葉に引き込まれ、オリエの言葉の群れの中を漂い始めていた。

オリエがわたしに話したのは、こんな思い出だった。

いや、思い出というのは正しくない。その出来事はいまもオリエを苦しめるのだから。

精神科のお医者さんならトラウマとか言うのかもしれないけれど、それも違うように思う。

オリエはその事件のことを「カスミのこと」と言う。だから、それは思い出でもトラウマでもなく、「カスミのこと」というしかないのだ。

カスミという女の子とオリエは小学校五年の時に同じクラスになった。

カスミとオリエは誕生日も同じ二月で、身長も体重もほとんど同じ、国語が得意なのも同じ、好きなアイドルも同じだった。おとなしい性格も似ていたし、ひとりっ子で、飼っている犬を妹のようにかわいがっていたのも同じだった。オリエが飼っていたのは柴犬で、カスミが飼っていたのはチワワだった。

違っていたのはオリエの視力は両目とも一・五なのに、カスミはひどい近視で黒縁のめがねをかけていたこと。

「アラレちゃんみたいだった」

オリエはそう言った。

ふたりはすぐに仲良しになった。いっしょに手をつないで下校したし、交換日記に熱中したこともあったという。

ところが六年生の春になると、カスミの様子が少しずつおかしくなっていた。

オリエにはその理由がはっきりとわかっていた。けれども、オリエにはどうしようもな

かったから、その理由に気づいていないふりをした。

カスミははじめにあっていったのだ。

特定の誰からというわけじゃない。

もちろん、いつもいじめの中心にいるような子がいた。

でも、いじめを見て笑ったり、知らんぷりをしたりしている子もいじめの仲間だということにしたら、それはオリエも含めてクラス中のみんながカスミをいじめたことになる、オリエは小さな声で、でも、はっきりとそう言った。

「最初はきつと、いたずらとかで、いじめじゃなかったんだよね。でも、少しずつ、少しずつ、残酷になっていったの。ほんの少しずつだよ、目に見えないくらい、誰にもわからなくらい、ちょっとずつ残酷になっていったの。男子は、なんか退屈すると、休み時間にカスミの机にわざとぶつかったり、紙くずとかのゴミをゴミ箱に入れないでカスミの机の上に置いたり、それから、消しゴムのカスを集めてカスミの机に盛ったり、そんなことをしはじめたの。カスミは何をされてもだまっていた。先生に言いつけもしなかったし、ただばかりむいていたから、いじめやすかったんだと思う。教科書とかノートや下敷きを隠されてもだまっていたし、それで先生に『オオミシロさん、教科書は？』ってきかれても

『忘れました』とか言ってる。だから、みんな、調子に乗って、いろんなことをカスミに
はじめた。何ヶ月もの間、ずっと、ずっと、静かに、そっといじめたんだよね。たぶん、
みんな、悪いことしてるって気持ちをもたないですむから、だから、静かに、そっと、そ
してさ、全員でいじめたんだよね。カスミは、みんなが暗い気持ちを捨てるためにあるゴ
ミ箱みたいに、みんながポンって投げ込むイライラや怒りを、ただだまって口を開けて飲
み込み続けたの、きっと。でも、暴力とかはなかったんだ。そんなひどいことはなかった
の。でも、残酷だったと思う」

組んだ腕の上に額をのせ、机につっぱしたまま話を聞いていたわたしのまぶたの暗闇の
中で、いつの間にかカスミという女の子のぼんやりとした姿が動き回っていた。それは、
ガリガリにやせたアラレちゃんだった。

オリエはわたしの背中で語り続けた。縦笛みたいに高く、でも、小さな、小さな声で。

わたしは顔の向きを変え、左頬を腕の上ののせるとゆっくり目を開けた。机の大地の上
に鉛筆削り機の塔があり、その向こうに机のへりの地平線があり、そして白い壁の天空が
あった。

「残酷だったと思う。でも、一番残酷なことをしたのは、わたしなの。わたしが一番残酷

だったの」

オリエの言葉が止まった。通りを横断するのをためらっている人のように、オリエは何かが通り過ぎるのを待っているのかもしれない。それは、わたしの反応だろうか、それとも、オリエの心の中を通り過ぎようとしても、大きすぎて、ゆっくりとしか動けない思い出だろうか。

沈黙が続いた。

オリエが鼻をすすった。もう一度、すすった。そして、オリエはふるえながら通りを渡り始めた。

「カスミが死んだのって、わたしのせいなんだよね」

オリエの声は、まるで聞こえているかのようにふるえていた。

わたしはまた目を閉じた。まぶたの裏側のスクリーンで、やせたアラレちゃんが棺に入られ、斎場で焼かれた。わたしのおとうさんがそうだったみたいに。

目を閉じたまま、わたしは言った。

「カスミって子、死んだんだね……」

オリエがうなずいたのが、空気の動きでわかったような気がした。

わたしはこのとき、小学校の時に自殺した女の子のことをオリエから聞いたような気がして、頭の奥をまさぐった。そうだ、コックリさんだ。コックリさんをちゃんと帰さなかったから死んだ子がいるとオリエは言っていた。その子がカスミなのではないだろうか。

「その子、コックリさん、帰さなかったときの子？」

「うん」とオリエは小さくせき払いするような返事をした。

「なんで死んだの？ 自殺？」

またオリエがうなづくのを、わたしは背中を感じた。

「カスミとふたりでコックリさんをした。コックリさん、はやってたの。でも、コックリさんのせいじゃないの。わたしのせいなの。わたしが殺したようなもんなの」

そう言ってオリエは鼻をすすった。しきりに。

「そうかあ、自殺なんだ……」

わたしはそう言って目を開けた。顔を上げ、振り向いてオリエの顔を見たかったけれど、それにはなにか勇気のようなものがいった。

わたしはゆっくりと振り向いた。

うつむいていたオリエの顔が、首振り人形みたいにはね上がり、小さな目がわたしの目

と真正面から出会った。蛇口でふくらんでは落ちていく水道の水のように、目尻で涙が大きな粒を作っては、次から次へと大急ぎで流れ落ちていく。

わたしは、いままでわたしが流した涙を思い出した。

なぜ、涙はあふれ出るのだろう。涙にはどんな役目があるのだろう。泣くと楽になるなんて言うけれど、わたしが泣いたときは楽になんかならなかった。泣けば泣くほど、私の体は重くなり、底なしの沼へと沈んでいくような気がした。

いま、オリエもそうなのだろうか。冷たいスライムのような底なしの沼につかって、もがいているのだろうか。わたしには、オリエがあわれに思えてきた。

オリエが言った。

「カスミは13階から飛び降りたの。カスミの家は8階だったから、一番上の13階まで上って、そして飛び降りたの。すごい大きな音がしたんだって、何かが発射したような音だったって。駐車場のクルマとクルマの間にカスミは落ちて倒れてたんだって。痛かったろうな、痛かったろうな」

オリエの目が見ているのはわたしではなかった。オリエの視線はわたしを素通りしていた。

「わたしのせいなんだ。だって、わたし、カスミのランドセルに『死ね』って書いたんだもん。マジックで『死ね』って書いたんだもん」

そう言うオリエは口をポカンと開けたまま、少しの間、身じろぎをしなかった。

「親友だったのに、どうして、そんなこと、ランドセルに書いたの？」

心でそうつぶやいたつもりが、声になった。

「わたしが弱虫だったから。ヤマザキさんたちが、休み時間に、カスミのランドセルに『死ね』って書いてわたしに言って、書いたらグループに入れてあげる、書かなかつたら一生グループに入れないし、カスミと同じようにするって言われて、ちょうどカスミがトイレに行っているから誰が書いたかわからないしって言われて、わたし、足が本当にガクガク震えて、本当に手も震えて、顔も真っ赤になって、もう怖くて、おそろしくて、何も考えなくて、したらヤマザキさんがわたしにマジックを渡して、で、で、そいで、わたし、『死ね』って大急ぎで書いたら、教室の入り口で、トイレから戻ってきたカスミが、カスミが、わたしを見ていて、見ていて、そいでも、そのときはわたしに何にも言わなくて、わたしは、ずっと下を向いたまんまで、その日、そのあと、どうしたか、ぜんぜん覚えてなくて……」

涙でヌルヌルしているオリエの顔を見ながら、わたしなら「死ね」と書いたろうか、どうしただろうかと自分に問いかけていた。答はなかった。

オリエはふるえる大きな息を一つした。

「次の日から、カスミは学校を休んだの。わたし、カスミに謝りに行けばよかった。勇気が出なかった。あやまればよかった、勇気出して、会いに行けばよかった。そうすれば、カスミは死ななくて、いまも生きてた。あやまればよかった、あやまればよかった。会いに行くだけでもすればよかった」

目をつぶると、またやせたアラレちゃんが現れて、オリエと同じように泣いていた。

「1週間して、カスミは飛び降りたの、13階から。遺書はなかったの。でも、クラスのみんなはわかってた、なんでカスミが死んだのか。みんなコソコソ、わたしのせいだって言ってた。でも、先生は何にも知らなかった。先生や教頭先生が、クラス中、ひとりずつ話を聞いたけど、誰もいじめのことは言わなかった。みんな、いじめだとは思いたくなかったんだ。あれはただの意地悪で、いじめじゃないって。先生たちも、カスミのおとうさんやおかあさんも、本当のことを知らないんだ。でも、クラスのみんなは知っている。わたしのせいだって、わたしがカスミのランドセルに『死ね』って書いたせいだって。わたし

が『死ね』って書かなければ、カスミは死ななかつたんだ」

わたしの心の中に、「死ね」という文字が書かれたランドセルの真っ赤な革が見えた。その文字は、金色の留め金の横で、小さく、ふるえていた。でも、そのランドセルは、どこにいったのだろうか？

「ランドセルに『死ね』って書いたんなら、大人たちはいじめがあつたってわかるんじゃない？」

わたしがそうつぶやくと、オリエはつらそうに唇をこじ開けた。

「ランドセルは無かつたの。どこにも、ランドセルはなかつたの。きっと、カスミが捨てたの。どこか、誰も探せないところに、カスミはランドセルを捨てたの。なんで？　なんで？　なんで？」

オリエは、わたしを問いつめるように見つめた。わたしには、その理由はハッキリしているように思えた。だから、わたしはすぐにこう答えた。

「死んだのはオリエのせいじゃないって言いたかつたのかも」

オリエの小さな目に何かが見なぎって、わたしにはその何かが破裂しそうに見えた。もちろん、そんなことはなく、それぞれの瞳から大きな粒の涙がふたつ、逃げ出した透明な

昆虫のようにポロンと飛び出た。

わたしは椅子ごとまわってオリエに背中を向けると、また、机の上で腕を組み、ゆっくりとつぶした。わたしは言った。

「ゼレにその子連れられてきてもらって、その子に謝りたいわけ？」

オリエが首をふるのがわかったような気がした。

「わかんない。わかんないけど、このままじゃダメなの。カスミと話をしたいの。カスミが今何してるのか、元気なのかどうか知りたいの」

わたしは顔を上げた。

「元気かどうかって、カスミって子、死んでるんでしょ。そんなの、へんじゃない」
返事はなかった。

わたしはふとハルミのことを思い出した。ハルミとオリエは同じ小学校だ。

「ハルミはその子のこと知ってるの？」

オリエは少しかすれた声で「え？」と聞き返した。

そのときわたしはとても気味の悪い何か、とても汚い何か、とても陰気な何かに触れてしまったような気持ちに襲われた。指やのどがひんやりとして、腕に鳥肌がたった。それ

が何かすっかりわかっているはずなのに、すぐには形にならなかった。まるで幽霊に出会ったような気分だった。

なぜなら、ハルミの姓が「ヤマザキ」だったから。

締め切った窓の向こうからまた激しく鳴き始めたセミの声が聞こえてきた。わたしにはオリエが沈黙でできたゼリーのような膜の中に引きこもっていくのがわかった。

まぶたごしに腕に押しつけられたわたしの眼球は、ぐるぐる回る、夜の万華鏡のような模様をまた眺めていた。

突然セミの鳴き声がやんだ。

とつても静かだった。

そして、なぜだか、とつても安らかだった。

……目が覚めた。

わたしは眠っていた。

頬にあたる腕の感触と、そして腕にあたる頬の感触の両方を、いっぺんに感じた。それは溶けて混じり合う二枚のチョコレートのようなようだった。

忘れ物を思い出した人のように、わたしはあわてて顔を上げ、そして振り向いた。

くの字に体を折り曲げて、オリエはわたしのベッドの上に横たわっていた。目を閉じて、ゆっくりと息を吸っては吐き、身じろぎもしない。両手は胸の前で祈るように合わさっている。

オリエも眠っていた。

そして二日後。オリエと約束した「あさって」がやって来た。

その日は激しい夕立があった。突然、遠くで雷がとどろき、やがて地面に向かって垂直に突き刺さる何億本もの矢のように、脇目もふらず、無数の雨粒がどーっと落ち始めた。

部屋の窓からわたしは、遠く、坂道の登り口にあるバス停を、その無数の雨粒ごしにじっと見おろしていた。そこにハルミをつれたオリエが現れるはずだったから。

わたしの住むマンションのエントランスから、だらだらと大きなS字を描いてバス通りに続くその坂道が、たくさんの雨水を集めて流れるようすは、まるで熱帯の川のようにだった。わたしは、高い樹の枝に雨をよけてとまる熱帯の鳥のように、水煙をあげて激しく泡立つ川を見つめる。

まだ真夏の午後4時前だというのに、巨大な手のひらが空いっぱいにかざされたように、世界中が不吉に薄暗く、そしてわたしは、空がこんなにも大量の水を隠していたことに驚いていた。

わたしはハルミとオリエがこの洪水のせいで、何かひどい目にあえばいいと願っていた。ハルミとオリエは罰を受けなければいけないのだ。「死ね」とランドセルに書いたその瞬間から、オリエはハルミたちのグループに迎え入れられ、ヤマザキさんと呼んでいたのをハルミと呼び、そして、いまこの瞬間まで、ずっとその契約を生き続けてきたのだ。なんて意地汚いのだろう。そのことでオリエが苦しんでいるにしても、わたしにはそのだらしない心が気味悪かったし、憎らしかった。

知らぬ間にそんなふうに唇をかねて高みから遠くのバス停を見おろしているわたしは、熱帯の鳥などではなく、きつともっと醜い、カラスのようだったかもしれない。

それでも、悪意にひたる心地よさに、わたしは抵抗できなかった。

約束の時間の4時に、空にかざされた手が引き抜かれたかのように、急にあたりが明るくなった。雨は勢いよく降り続けていたけれど、空を走り去っていく黒々とした雲たちのあとからは、青い色がじわりとしみ出していた。光はその青みからやってきた。まるで、水の雨と光の雨のふたつが競うように、そしてキラキラとからみ合いながら降り注いでいるようだった。

やがて水の雨は降ることに飽きたように、空の上のどこかに少しづつ引き返していった。暗い雲たちはまだ空のほとんどをおおって、てんでバラバラに走り回っているようだったけれど、空の青みはますます大きさを増し、力強く輝きだしていた。

光の強さと調子を合わせるように、鳥たちがさえざり始め、セミたちもまた不愉快な音を立て始めた。雨が地面に叩きつけられる轟音だけが響きわたっていた世界が、さまざまな音に満ちたにぎやかな世界へと大急ぎで戻っていった。

そして、バス停にバスが止まった。バスが再び走り始めると、バスの姿に隠されていたハルミとオリエの小さな小さな白とピンクの影が現れた。

雨はすっかりあがってしまった。

ズルイ。

わたしは、そうつぶやいた。

バス通りを横切ったふたりは坂道を上り始めた。マンションのエントランスに近づくにつれ、しだいにハルミとオリエの顔がはつきりとしてきた。窓から見おろしているわたしに、ふたりはちっとも気づかなかった。

オリエはハルミになんて言ったのだろうか？　どういう理由を告げて、ハルミを連れてきたのだろうか？　そして、ハルミはどうしてわたしの家に来る気になったのだろうか？

ハルミを連れてくるのがウィジャ盤を使うための条件だと言ったのはわたしだけだけど、ほんとうにハルミが来るとは思っていないなかった。ハルミとわたしはあの夜以来、学校で出会っても互いに顔をそむけあっていたし、ウィジャ盤を使う理由をオリエがハルミに告げたとも考えられなかった。

だとしたら、オリエはハルミをなんと言ってだましたのだろうか？

建物の影に入って視界から消えたふたりから、わたしは視線をまっすぐ前に移した。そこには、見慣れたはずの、遠くに広がる東京が、光と影にまだらに染められて、ゆらゆらと揺れていた。激しい雨を引き連れた黒い雲たちは今、都心を襲っているのだ。

チャイムが鳴った。

ドアスコープをのぞくと、ゆがんだオリエの顔が正面にあった。ハルミはピンク色のTシャツの肩だけが遠く右側に見えた。

ドアを開けた。

オリエだけが立っていた。白いTシャツを着た笑わないオリエだけが、首をかしげることもせず、まっすぐ目の前に立っていた。

「おじゃま、します」

小さな声でそう言って、オリエが私の横をすりぬけて玄関に足を踏み入れた。

ハルミがドアの影から現れた。

「あたしは無実を証明するために来たんだから」

ハルミは無表情でわたしにそう言った。視線はわたしではなく、オリエに向けられていた。

オリエがハルミにウソをつかなかったことを、わたしはその一言から知った。そして、オリエが強い気持ちを支わなかったことも。

あの夜と同じように、ハルミはベッドに腰掛け、わたしは勉強机を背にして椅子に座り、そしてオリエはカーペットの上で正座した。

しばらく、誰も口を開かなかった。何を言えばよいのか、何から始めればよいのか、わたしもオリエもハルミもわからなかった。

玄関でドアが閉まる音がした。おかあさんがどこから帰ってきたのだ。するとハルミが言った。

「塾があるんだから、あたし」

わたしはその言葉に腹が立った。口がとがった。

「だから、なんなの」

カマキリみたいなハルミが、カマキリみたいにわたしを見た。

「オリエからどう聞いたのかしんないけど、あんたに言われたくない」

「どういう意味？」

「だって、関係ないじゃん」

「なんの関係？」

ハルミはそっぽをむいた。

「だって、あなたがいじめたんでしょ、カスミって子。それで死んじゃったんでしょ」

わたしは心地よい残酷さを味わいながら、そう言った。

ハルミはわたしを馬鹿にしたように上目づかいで見つめると、ゆっくりとこう言った。

「ち、が、い、ま、す。わたしは不良でも、悪人でもありません。人殺しでもありません。わ、た、し、は、普通の人間です。オリエがなんて言ったのか知らないけど、いじめなんかなかったんだから」

「じゃ、どうして、ランドセルに『死ね』って書けて、オリエに言ったの。脅迫するみたいだよ」

「ふざけた、だ、け、で、す。ほんとに書くなんて、思わなかったし。普通、言われても書かないし。普通、ふざけてるって、わかるし。びっくりしたもん、オリエが書いたときは。まさか、って感じ。わたしは無実、で、す」

わたしの胸の両方の肺で、熱く黒々としたものがものすごい勢いでふくらみ、それはすぐに体の下の方に飛んでいき、わたしの怒った右足はベッドをけとばしていた。

ベッドが揺れ、そしてベッドに腰掛けていたハルミが揺れた。まるで首振り人形みたいにハルミが揺れた。

ハルミの目が細くなった。

まるで男のコのような低い声でハルミが言った。

「帰る。帰る」

目に見えない獲物に飛びかかるカマキリのように立ち上がったハルミが、すぐに何かに引つ張られてまたベッドに腰を下ろした。オリエがハルミのジーンズをつかんだのだ。オリエはそのまま、ハルミの足をだきかかえるようにした。

ハルミが低い声でオリエに命令した。

「はなせよ。帰るんだから、はなせよ」

オリエは黙ってハルミの足を強くだきかかえたまま、その力をゆるめようとはしなかった。

「はなさないよ、けるよ。けつとばすよ。けつとばされてもいいの」

ハルミの男のような声は、しっぽを出した悪魔みただった。でも、そのあとのオリエの言葉のほうむしろ、わたしには衝撃的だった。オリエはハルミにこう言った。

「いいよ、けりたいんだったら、ければ。でも、そうしたら、ハルミ、友だち、誰もいなくなるよ。あたししかないんだよ、ハルミの友だち」

なんていう二人なんだろう。そんなの、友だちなんだろうか？

それに、カスミという子を死に追いやるほどの力と手下を持っていたヤマザキハルミに、いまは友だちがオリエしかないなんて、いったい何があったというんだろう？

わたしはまったく理解できない異国の言葉で書かれた物語を、目の前にしているような気分だった。

ハルミはオリエから顔をそむけて、ベッドの端に腰掛けたままだ。

わたしは思った。ハルミはきつと帰らない。なぜ？　ひとりぼっちになりたくないから。それなのに、カスミって子は、ハルミによってひとりぼっちにさせられたのだ。むりやり友だちを奪われたのだ、たったひとりの友だちを。

でも、どうしてハルミも、そしてオリエもひとりぼっちを恐れるの？　ふたりが失いたくないのは、友だちだの、友情だの、そんなきれいな言葉でくくられるものなんかじゃない。ふたりは、ただただ、ひとりぼっちになることの恐ろしさを前にして足がすくむのだ。カスミという子にしてもそうだ。ひとりぼっちとは、死と交換するほどに耐えられない

ことなんだろうか？　ひとりぼっちとは、死よりもまだ恐ろしいものなのだろうか？

班替えの時に、誰からも指名されないこと。休み時間に誰からも校庭に行こうと誘われないこと。話しかけても聞こえないふりをされること。誰のお誕生会に呼ばれないこと。誰かといっしょに笑い転げることが無いこと。楽しい気持ちでいると目ざとくそれを見つけた誰かの手ですぐにこなごなにされること。ときには誰かの怒りや不満やイライラのいけにえにされること。

それは死ぬことより恐ろしいことだろうか？

そうとは思えない。小学1年から誰の誕生会にも呼ばれたことがないわたしには。

ハルミの足を抱きかかえるようにしたまま、オリエがわたしを見た。

「ウィジャ盤を出してほしいんだ。ゼレを呼んでほしいの」

言われるがままに、わたしは引き出しからそれを取り出すと、ベッドの上に置いた。そして机の上に準備しておいたティーカップを、ウィジャ盤の上にのせた。

「ノートはわたしが持ってきたから」

オリエはそう言って、ハルミの足をかかえた自分の両手を放すべきかどうか悩むようにうつむき、それから、そっぽを向いたままのハルミを見上げ、ゆっくりと手を放した。思っ

た通り、ハルミは身じろぎもしない。すねた子どものように、ドアのほうを見たまま、硬く口を結んでいる。

オリエはキャンパス布のトートバッグからノートとペンケースを取り出した。ノートは真新しく、値札シールがついていた。

ペンケースからボールペンを出して、ノートといっしょにオリエはハルミの前につきだした。ハルミに無視されると、オリエはノートとペンを、ハルミの横に置いた。

そして座ったまま手を伸ばし、ベッドの上のウィジャ盤とティーカップを取り上げると、オリエは自分とわたしのちょうど真ん中にそれが来るように、カーペットの上にゆっくりとおいた。

オリエは体の向きをかえてわたしに向かい合うと、正座していた足をくずして横座りになり、首を右にかしげてわたしを見つめた。

わたしのどのあたりで、意地悪な何かゴロゴロ言っている。わたしは、それをはき出した。

「もう一度ちゃんと聞きたいんだけど、ゼレを呼んでどうしたいわけ？ ゼレなんて、わたしたちの無意識がつくりあげたものだって、わたし、思ってる。死後の世界なんてない

し、霊なんてもんもないし……。それなのに、もし、オリエが、カスミって子呼び出して、そして謝って、そしてそれで気がすんで、自分のしたことが全部許されたと思いたいんだとしたら、それって、すごいズルイと思う。偽善だよ。自分で自分につごうのいいお芝居をして、それを本当のことだって思いこもうとするのと、それってどう違うの？」

オリエの口が素速く反応した。

「それでもいいの。なんて言われても、わたし、かまわない。だって、だって、苦しくて、苦しくて、わたしも自殺してしまいたいそうなんだもん。なんでもいいの、ここから出られるんなら、何言われてもいいの。わたしね、いままでね、きょうまでね、毎日、カスミのことを考えなかった日は一日もないの。毎日毎日、考えたくなくても、思い出したくなくても、カスミのほうからやってくるんだもん」

ハルミがあわてたように、そっぽを向いていた顔をオリエに向けると、こう言った。

「どういう意味？ カスミの幽霊が来るってこと？」

オリエは首を振って答えた。

「わたしの心の中にカスミの幽霊が、ずっと、ずっと住んでるみたいなの。いつもいつもひっかかるの、カスミの手とか、足とか、肩とか、心の中で。わかる？ 何か嬉しかった

りとか、わたしの心が動くたんび、カスミの何かがわたしの動く心にぶつかるの、ひっかかるの。いっつも、いっつも、ぶつかるの。まるで、体がひとつで頭が二つある人みたいな、あの、あの」

「シヤム双生児」と、わたしがかわりに言葉を見つけた。オリエは続ける。

「わたしの中に、もうひとり、誰かが住んでいて、そのせいで、わたしはまっすぐ歩くことができなくて、いっつも何かにつかつかつてぶつかつてころぶ自分がいて、そのわたしの心の中に住んでいる誰かは、きつと、カスミで、わたしはずつとずつと心がグシャグシャなままで、だから、すんごく、すんごく、苦しいの」

「本当の幽霊じゃないんだ」とハルミは言って小さなため息をついた。それはきつと安心のため息だ。ハルミは弱虫なのだ。

だから、オリエがこう言うのと、ハルミの肩がぶるっと震えた。

「ううん、カスミ、何度か見た」

オリエはハルミを見上げ、言葉をつないだ。

「何度か、見た、カスミ。わたし、見るの、ときどき、へんなもの。疲れてるときとか、昼寝してるときとか、金縛りにあうと、へんなものを見るの。キーンって音がして、あ、

この音、嫌いだと思つてると、金縛りが始まって、そいで目を開けると、そこにときどき、へんなものがあるの。そんなときに、何度も、カスミが来た。部屋は明るいときでも、カスミはポーっとして暗いの。でも、カスミだつてはつきりわかるの。髪を感じや、猫背っぽい姿勢とかで、カスミだつてわかるの。わたし、必死で叫ぶんだけど、声が出ないし、からだも動かない。でも、金縛りはすぐにとけて、起きあがると、もう、カスミはいない」「それって昔の話?」

ハルミがきいた。

「うん。でも、最後は最近」

「いつ?」と、ハルミがオリエを見おろした。

「おととい。おとといの昼」

オリエがわたしの家にやってきた、あの日だ。

「でもさ、それって、幽霊じゃなくて、夢ってことかもしれないじゃん」

ハルミはオリエにくつつかかるような言い方をした。

「夢じゃない。夢と違うから。でも、現実でもない。いま、こうして見えてる見え方とも違うから」

「じゃ、何なの？ 幻覚ってやつ？」

ハルミの口からつばが飛んだ。

「そうかも。でも、わたしにとっては、夢も幻覚も現実も、あまり関係ないの。カスミがいつも、いつもわたしをそばにいてくれるってことには、ちがいないの。早く、わたし、楽になりたい、楽になりたい」

結局、そういうことなのだ。

わたしはオリエに言った。

「自分が大事なのよね、カスミより。自分が楽になりたいから、カスミって子に『もう、あっち行ってください』って言いたいわけでしょ」

オリエはうつむいた。じっとして、しばらく考え込んで、そして顔を上げ、ふるえる声でこう言った。

「はい、そうです」

オリエの小さな目のふちがきらめいていた。

オリエはわたしに向かって頭を下げた。

「ですから、お願い、ゼレを呼んでください。お願い」

わたしは言った。

「じゃ、そうしましょうよ。ゼレがカスミを呼んだら、カスミに裁かれるのはあなたたちなんだし。死後の世界があれば、だけどさ」

わたしは窓を背にして、ウィジャ盤の前に座った。明かりは机の上のスタンドだけだけれど、外はまだ明るく輝いていて、角部屋のわたしの部屋をその夏の夕方の光がまんべんなく満たしていた。

パチヨリの滴を手の平にとってのばし、香りの分子が部屋中に飛び散るようにと、わたしは腕をゆっくりと振り回した。

懐かしい香りだった。そして、わたしは突然におとうさんのことを思い出した。どこか頭の真ん中にあるスクリーンの上で、おとうさんは坂道を上っていた。わたしはいっしょうけんめい、おとうさんを追いかけていた。暑い夏の風がわたしを包み込む……。

わたしは呪文を唱えた。

そしてティーカップの底にそっと手を添えた。わたしの指をさけるように、ティーカッ

プの底に、同じようにしてオリエが手を添えた。

オリエが部屋の天井を見上げ、ゼレを呼ぶ言葉を口にした。

「ゼレ、ゼレ、ここに来てください。お願いがあるんです。ゼレ、ゼレ、ここに来てください」

ティーカップがふるえた。いや、正確に言えば、わたしの手がふるえたのだ。

オリエはもう一度ゼレを呼んだ。

「ゼレ、ゼレ、あなたにお願いがあります。どうか、ここに来てください」

ティーカップは沈黙を続けた。

オリエはなおもゼレを呼び続けたけれど、ティーカップはもはやふるえることさえしなかった。

ゼレがやってこない理由はわたしにあると、わたしは感じた。おとうさんと呼ばうとしたときは、わたしの気持ちにははっきりとした違いがあったから。だから、こうオリエが言ったとき、素直にわたしは応じた。

「ヒナノ、悪いけど、ハルミとかわってもらっていい？」

ベッドの上にはい上がると、ハルミはわたしを避けるようにベッドから立ち上がり、オ

リエのななめ正面に座った。ハルミはオリエに言われるがままにティーカップの底に手を添えた。わたしは、オリエの買ってきたノートとボールペンを手にして、ベッドに腰掛け
た。

オリエは再びゼレを呼び始めた。わたしはティーカップの持ち手の行方に目をこらした。すると突然、ティーカップがウイジャ盤の上をグルグルと回り始めた。まるでオリエとハルミがティーカップでウイジャ盤をなでまわしているようだった。

やがてティーカップは動くのをやめて、息をとる未知の昆虫のように見えない羽を閉じて一カ所にとどまった。

ティーカップの持ち手が指し示すものを、わたしは言葉にした。

「イエス」

オリエがたずねた。

「ゼレですか？ ゼレが来たのですか？」

ティーカップはウイジャ盤を一周してまた元の位置に戻った。わたしはその文字を読み上げた。

「イエス」

わたしが言い終わらないうちに、ハルミが「やだ、やだ」と叫びながらティーカップから手を放した。

「やだ、やだ、やっぱりやだ、やだ、やだ」

そう言って首を振るハルミは、ダダをこねている小さな子どもと少しも変わらない。わたしの胸に真っ黒な墨のような何かがわき出て、わたしはハルミにこんな言葉を投げつけた。

「ひきょう者」

ハルミはぐつとあごを引いて、わたしをにらんだ。わたしは、もう一度言った。

「ひきょう者」

ハルミはさらにあごを引き、まっすぐわたしに向けた瞳の奥は金属のような光でチラチラしていた。それはまるで五十円玉でできた瞳のようだった。

わたしの心は身構えた。どんな言葉の毒矢が放たれようと、あるいはハルミがこぶしごと飛びかかってこようと、すぐに反撃できるように、わたしは頭の中で作戦を練った。そして、もう一度言った。

「ひきょう者」

弓を射るように引き絞ったあごを、射ることをあきらめたようにハルミはゆっくりゆるめると、視線をウィジャ盤の上に戻しながらこう言った。

「ひきょう者でいいよ、別に。でも、弱虫じゃないよ、誰かみたいに」
下を向いていたオリエがつぶやいた。

「誰かって、誰？」

「カスミに決まってんじゃない。弱虫じゃん、あのコ。弱虫だから死んだんじゃない。迷惑だよ」

オリエは顔を上げてハルミを見た。

「弱虫だから死んだの？」

「じゃあさ、あのコは強かったわけ？ 強いコだったから死んだの？ アホくさ。弱虫だから逃げたんじゃん。それで死んだんじゃない」

「逃げた？ 何から逃げたの？ ヤマザキさん、何から逃げたの、カスミは？」
ハルミはまたアゴを引いて、視線はオリエをなめた。

「知らないよ。逃げたい何かがあったんでしょ、たぶん」

オリエはハルミに向かって言った。それはまるで、挑発する猫のようだった。

「ヤマザキさん。わたしがさ、ヤマザキさんのことをハルミって呼ぶようになったのって、ヤマザキさんがさ、中一の時に、ハルミって呼んでいいよって言ったからでしょ。みんなハルミって呼ぶから、ハルミって呼んでいいよって。でも、その時、ヤマザキさんが言う『みんな』って、もう誰もいなかったでしょ。もう、誰もいなかったよ。小学校の時の友だちはみんなヤマザキさんのまわりからいなくなってた。いなくなってたのって、別にヤマザキさんがこわくなったからでもないし、ヤマザキさんのことを嫌いになったわけでもなかった。ヤマザキさんはわかってたと思う。みんな、ヤマザキさんのことが必要じゃなくなっただよ。みんなは、もう、ヤマザキさんに用が無くなったの。だから、みんなはヤマザキさんに飽きて、それで、ヤマザキさんはひとりぼっちになったの。わたし以外に誰も、いっしょにお昼食べたり、部活したり、テレビの話したりする人はいなくなった。小学校の時は、あんなに怖かったヤマザキさんなのに、今はぜんぜん、誰も怖がらない。でも、ヤマザキさんはひとりぼっちを怖がってる。だから、わたしにいつも合わせてる。きょうだって、ひとりぼっちになるのがいやだから、来たんでしょ。それって、弱虫じゃないの？」

のどが渴いたカマキリみたいに、ハルミは下あごをハーン言いながら動かしていた。

わたしはオリエにきいた。

「どうして、用が無くなったの？」

オリエはわたしではなく、ハルミを見つめながらこう答えた。

「みんな、小さな悪をお腹いっぱい味わって、満腹したから。ヤマザキさんは食堂のコックさんの、お調子者の……」

そう言うと、オリエは、オリエらしくない、かすれた音色で、は、は、は、と笑った。「イライラしてるから、アイツのこといじめたいんだけどってお客さんが来ると、いじめ一丁って、ヤマザキさんは料理を始めるの。大繁盛したよね。お店に入らない人も、いつも気になって、ヤマザキさんのお店をチラチラ見てた。いつの間にか、お客さんよりコックさんのほうがえらくなってる。でもね、いじめのコックさんを作ったのは、お客さんなんだよね。みんなはいつの間にか、ヤマザキさんが悪の女王で、さからうと痛い目に遭うから、言うことを聞くんだみたいに思うようになってたけど、でもさ、そういうヤマザキさんを作ったのは、みんななんだよね。みんなして、ちっちゃな悪を、ヤマザキさんに支払っていったら、いつの間にか、ヤマザキさんは悪の百万長者になってたの。でも、カスミが死んで、みんな、こわくなったの。ヤマザキさんではなしに、自分のことが。自分の

小さな悪が、お金で言えば1円ぐらいでしかない悪が、人を死に追いやることもあるんだって知ったから。そして、気づいたの、もう満腹だよって、ああ、おいしかったよって」

「じゃあ、みんな、カスミって子が自殺したことを面白がってたってわけ？」

わたしが聞くと、ずっとウィジャ盤を見おろしていたオリエは顔をあげ、わたしを苦しげに見つめた。ハルミはあいかわらず、下あごを突き出すようにして、息も荒く、オリエをにらんでいた。

「うん、そう思う……。事件だ事件だっておどけてた男の子がいたし、ニュースに出たのをビデオにとって、それを回し見してた女の子たちもいたよ。ほんとは殺人事件らしいとコソコソ話すコもいた。それから、飛び降りた13階の踊り場に……」

オリエは言葉を飲んで、そしてうつむいた。

「13階の踊り場にあつたのは、靴とメガネか、靴だけか、メガネだけかって、ずっと話している女の子たちもいたし……。カスミの告別式にクラス全員で行ったんだけど、女の子は競争するみたいにみんな泣いてた。でも、帰り道、歩きながら、久しぶりに泣いた、とか、泣いたの3年ぶりとか、笑いながら言いあつた。遠足の帰り道みたいで楽しそうだった。男の子なんか、どれくれえ痛えの、痛えって感じる前に死んでるよとか……」

オリエは目を閉じた。記憶をまぶたの内側に映写しているのかもしれない。

「アイツ、存在感なかったから、死んでもあんまし影響ねえって言った男の子もいた……。わたしが死んだら、わたしもそう言われるのかなって思った。だって、たぶん、カスミとわたしって、クラスで存在感がない二人だったから。存在感が無いどうしだから、仲良くなれたんだし。あまり、好かれるほうじゃないし。ヒナノだって、わたしのこと、好きじゃないでしょ。一回、ブスって言われたし」

わたしは体中があつという間に熱っせられたのを感じた。ものすごく辛いものをいっぺんに食べてしまったときのようだった。

「いいの、別に嫌われても」

オリエは頭をたれて、ウィジャ盤を見つめた。

「どうして、カスミだったんだろ。わたしでもよかったんだ。おんなじくらい存在感無かったんだし。影響力なんて無かったんだし。わたしが教室にいるかいらないかなんて誰も興味なかったんだし」

オリエは視線をウィジャ盤に落としたまま、ハルミにたずねた。

「ヤマザキさん、どうしてカスミだったの？ どうして、わたしじゃなかったの？ わた

しでも、よかったんでしょ？ わたしのランドセルに、カスミが『死ぬ』って書いてもよかったですよ？」

穏やかに煙擧する人のように、ハルミは息をハーパー言わせるだけで、その問いに答えようともしなかった。

「ヤマザキさん、いいよ、答えなくて。聞かなくて、わかるもん……。ヤマザキさん、わたしがヤマザキさんのそばにいるの、なぜだか教えてあげようか。わたしのおかあさん、病院でヘルパーさんしてるの。いろんな人の体を拭いてあげたりしてるの。そしてね、ヤマザキさんという女の人の体も拭いてあげてるんだよ」

ハルミのハーパーという肺の音が止まった。

「ヤマザキさんのおかあさんでしょ。言ったの、おかあさんが、わたしと同じ中学校の子のおかあさんだよって。ヤマザキさんのこと、病院でいつも見てたって言ってたよ。ヤマザキさんが小さい頃から、ずっと見てたって。毎日、小学校の帰りに、ランドセルを背負ったまま病院に来て、ヤマザキさんはおかあさんのベッドの横で、椅子にちょこんと座って、漫画読んでたって。毎日そうだったって。ただ、そばにいて、話もしないで、漫画読んでたって、毎日そうだったって。ヒナノ、なぜだかわかる？ ヤマザキさんのおかあさ

んは、話せないの。体も動かせないの。目をつむることしかできなかつたの。そういう病気の。体中の筋肉が使えなくなる病気の。絶対に治らない病気の」

オリエはハルミを見つめていた。ロールシャツハテストの絵のように、わたしは宙ぶらりんだつた。そんな、しびれたようなわたしの感情をハルミの低い声が切り裂いた。

「ママはね、今はもう、まぶたも動かせないよね。だからね、目玉が乾かないように、顔に白い布をのせるんだよ。ママはね、ずっと息してる死体なんだ。息してるけど、死体なんだ。目の前にいるのに、一度も話したことないし、声も聞いたことないし。わたしのママは息してるけど死体なんだ」

宙を見すえたハルミの目に、わたしは見覚えのある憎悪の輝きを見つけた。どこで見たのだろう？ 答はすぐに見つかった。その輝きは、わたし自身の目に巣くつた憎悪の輝きと同じものだった。神様への憎悪、宇宙への憎悪。絶望を受け入れないために、ただ一つ残された手段……。

オリエが、つぶやいた。

「でも、ヤマザキさんに同情していっしょにいるんじゃないからね」

それから、わたしたち3人は黙った。気まずいわけでもなく、話すことがなかつたわけ

でもなく、なぜだかわからないけれど、黙った。長い時間、黙っていた。

いつの間にか闇が窓の外側にへばりつき、鏡のようになった窓ガラスに映ったわたしたちの姿は、まるで過ぎ去った日を切り取ったモノクロ写真のようにじっとしていた。そして、3人とも、なぜか似ていた。

「カスミと話したい」

オリエの言葉は、3人をまた磁石のように引きつけた。

「ヤマザキさん、いい？」

ハルミはコクリとうなずいた。そして意外なことに、ハルミの目から一粒、涙が流れ出たのだ。その一粒は頬をつたって、ハルミの小さくどがったアゴにたどりつき、その先端で数秒の間、小さく透明なてんとう虫のようにはりついて、そして音もなく、ハルミのスカートの上に落下した。

白いティーカップはウィジャ盤の上で、机のほうから落ちてくる電球の光につやつやと

輝いていた。

オリエがそのティーカップの底に指をのせた。人差し指と、中指と、薬指がきちっと並んだその上に、ハルミが同じように指を重ねた。

儀式などいらなかった。オリエは、いきなり、「ゼレ」と呼びかけた。
返事はない。

もう一度、オリエが呼びかける。

「ゼレ」

そして、もう一度。

「ゼレ」

ティーカップが動いた。

YES。

「ゼレですか？」

オリエの問いに、ティーカップはウイジャ盤を一周して、YESの位置に戻った。

「お願いがあります」

オリエはそう言うのと、苦しげにせき払いをした。

「カスミを呼んでください。オオミシロカスミを呼んでください」

ティーカップは、ためらうように、右に左にかすかに揺れたけれど、そのままじっと静かになった。オリエがもう一度言った。

「お願いします。オオミシロカスミを呼んでください。4年前に死んだ、わたしの……」
そこでオリエは唇をかんだ。そして黙った。

するとティーカップはバレエのピルエットのように一回転して、それから確実に一語一語をめざして歩き、立ち止まってアルファベットを指さし、そしてまた歩いては、立ち止まった。

わたしがそのアルファベットをつなぐと、ゼレの言葉が、まるで小さかった頃、ミカンの汁と紙で遊んだ、そう、おとうさんに教わった、あのあぶり出しのように現れ出た。

わたしはそれを読み上げた。

「カスミモ オマエト ハナシタガツテイル。ダガ カスミノ コエハ モウ チイサイ。
カスミハ トケカカツテイル。アア カスミガヤツテキタ。ダガ ワスレルナ。オマエタ
チガ オモツテイルヨウナ レイカイ ナド アリハシナイ。ダガ ワタシモ マタ ナ
ニモシラナイノダ」

ハルミはティーカップから手を放し、そしてなぜか手のひらをじっと見つめていた。

ゼレの言葉がわたしにはよく理解できなかった。オリエとハルミにとってもそうだったと思う。

オリエが、コホ、コホと小さなせきをして、そしてウィジャ盤に向かって問いかけた。

「カスミが来ているんですか？ あの、ここに？」

ハルミはいそいで手をオリエの指の上に添えた。

ティーカップは複雑に動きまわり、そして静かになった。わたしは、アルファベットを貼り合わせた。

「カスミノ コトバハ オマエタチニ トドカナイ。コトバハ コトバデハナク ソレヲ
オマエタチノ ノウミソハ タダシク キカナイダロウ。ダガ ソレデモ カスミハ
ヤツテクル」

オリエはゼレの言葉の意味の手がかりを探すようにゆっくり首を振って、じっとウィジャ盤を見つめた。

一瞬の後、ティーカップはまた意思を持った一匹の昆虫のように、ウィジャ盤の上を言葉紡ぎながら歩き回った。

それは、オリエとハルミの手を引きずるようにして、休みながら、休みながら、長い時間をかけて言葉を並べていった。

それは、こう語った。

「ランドセルを見られたくなかった。

おかあさんにランドセルを見られたくなかった。

みんなにランドセルを見られたくなかった。

ランドセルを隠した。

新しいランドセルを買って欲しかった。

新しいランドセルが欲しかった。

新しいランドセルがあればまた学校に行ける。

新しいランドセル。新しいランドセル。新しいランドセル。新しいランドセル。

学校に行くためには新しいランドセルがいます。

卒業して中学校に入るには新しいランドセルがいます。

でも、言えない。新しいランドセルを買ってとおかあさんに言えない。言ったらランド

セルのことを聞かれるから。

助けて。助けて。助けて。助けて。

新しいランドセルが無ければ、わたしはもうどこにも行けない。一生、ウソの病気にかかっていないと。一生、おふとんにくるまっていけないと。

助けて。助けて。助けて。

誰か新しいランドセルをください。新しいランドセルをください。

新しいランドセル。新しいランドセル。新しいランドセル。新しいランドセル。

オリちゃん、ごめんね、ごめんね、ごめんね。おかあさん、ごめんね、ごめんね、ごめんね。おとうさん、ごめんね、ごめんね、ごめんね。

ほんとうに死んでしまうなんて、死んでしまったあとまで、思わなかった。

もう一回、生きたい。でも、どうしたらいいのか、わからない。わたしは、たぶん、もうどこにもないから」

ノートに書き写したアルファベットを言葉にして、ようやく読み終えると、わたしは顔を上げた。

オリエとハルミはうつむいていた。二人の胸が、同じリズムで大きく上下している。

声に出している間、わたしは自分ののどの奥に、カスミという女の子がいる世界への通

路が口を開いているような、不思議な気持ちに襲われた。

同時に、達成感と恐怖、そして不安が混じり合った奇妙な感情がわたしを満たした。それはきつと、オリエとハルミも同じだったと思う。ついにカスミを呼び出したのだという思いと、それが実は死者の声であるという、皮膚がヒリヒリするような恐れ。そして、でも、もしかしたら、それは死者をよみがえらせているのはわたしたちで、つまり、これは自分自身をもだまして、生きている者だけの手の込んだ芝居なのではないだろうかという不安だ。

でも、オリエは、それが死者の言葉だということを疑うことをしなかった。

ウィジャ盤が伝える言葉が、カスミの肉体を焼き尽くした斎場の彼方、炎でさえぎられ、一度向こう側へと飛び越えたなら、決して戻ることのできない、生と死の境界の向こう側から届いた言葉なのだと、そう信じるのだと、オリエは自分に言い聞かせるように、何度も何度もうなずいていた。

そして、オリエはティーカップの上に指を置くと、こうたずねた。きっと、これこそがオリエのいちばん知りたかったことなのだ。

「カスミ、わたしのことをうらんでいますか？　にくんでいますか？　ゆるしてくれませ

か？」

ハルミが指をオリエの指に重ねて、同じようにたずねた。

「ハルミです。ゆるしてくれませんか？」

わたしは驚いた。そして、ハルミのその質問が、そのお願いが、わたしにはあまりにも唐突で、身勝手に思われた。

けれども、オリエの指もハルミの指も、そしてふたりの腕も、唇も、そして足も、なにもかもが、凍える人のようにブルブルと震えていた。

ティーカップは動かなかった。ティーカップの上のふたりの指があまりに震えていたため？ それともカスミが答を迷ったせい？

わたしもまたカスミの言葉に動揺していた。それでも、わたしの疑り深い脳は、それがほんとうに死後のカスミから放たれた言葉なのか、その証拠を見たいという欲望にうずいていた。そしてわたしの脳は、その欲望に打ち勝つことができず、こう聞いたのだ、死者であるカスミという女の口に。

「聞きたいことがあります。ランドセルはどこに隠したのですか？」

オリエとハルミが同時に顔を上げ、わたしを見た。ふたりの目にとまどうような光があっ

た。思わず、わたしはあやまった。

「ごめん」

それでも、ティーカップは動いた。オリエとハルミは驚いてウイジャ盤に視線を戻した。わたしもあわてて、ティーカップが指し示すアルファベットを追い、ノートに書き留めた。カスミはわたしの質問にこう答えた。

「死んでしまった。」

死にたくない。

でも、わたしはどこにもない」

そしてティーカップは動くことをやめた。

それはもちろん答ではなかった。わたしは混乱した。がっかりした。でも同時に、カスミの言葉が恐ろしい響きでわたしの胸をぐらぐらとゆすぶった。

オリエが顔を両手でとおった。指の間から「ゆるしてほしいよ、ゆるしてほしいよ」という声がかくぐもって漏れ出た。

ティーカップの柄は「I」の文字を指して眠るようにじっとしている。

「またやろう」

そう言つてハルミがティーカップに指を添えた。うん、とうなずいて、オリエがこんどはそのハルミの指の上に指を重ねた。オリエは涙混じりの声で、質問を繰り返した。

「カスミ、ごめんなさい。ゆるしてくれませんか？ 『死ね』 って書いてごめん。ごめん」

ティーカップはじっとしたままだった。待っても、待っても、動き出そうとしなかった。オリエがもう一度、質問をした。

「わたしのこと、にくんでますか？ ゆるしてくれますか？ ゆるしてください」

ハルミも口を開いた。まるで二重唱のように、「ゆるしてください」という言葉がわたしの部屋の壁にそっとこだました。

わたしはティーカップの動きに目をこらしていた。すると、それはまるで迷子になったかのように左に右にためらうように動いたかと思うと、意を決したように一気に一つのアルファベットへ向かつて進み、そして止まった。

H。

それから、Iへ。

そして、N。

そして、A。

それからティーカップは17回動いて、短い文章を作り出した。途中からすでに、わたしは息が止まりそうだった。それは、こういう音から出来上がっていた。おとうさんがわたしに向かつて叫んだのだ。

「ヒナ オカアサンヲ シナセルナ」

わたしは立ち上がり、ドアに突進し、ノブを荒々しく押し回し、廊下に飛び出た。目の前でおかあさんの部屋のドアが開いたままになっていた。わたしは左手を見た。廊下の奥に電気のついていない真っ暗なリビングルームが、異世界への入り口のように口を開けていた。その奥にベランダが見え、そこに、さらに暗く、さらに黒い、ほっそりとしたかたまりが、今にも風に吹き飛ばされそうな軽さを帯びて、ゆらゆらと揺れていた。それは宙に浮かんでいる根のない植物のようにも見え、そしてその黒い無数の花弁を風に揺らしている植物は、自分を風がさらっていくことを乞い願い、祈っているように思えた。

わたしは走った。わずかの距離が無限に感じられた。それでも走った。走って、そしてその揺れる植物にわたしは抱きついた。やわらかい肉と、細い骨と、やさしい温度とを、わたしはからだ全体で感じた。あたたかいそれらが、驚きとともに、振り向こうとした。わたしは叫ぼうとしたが、それは、ささやきのようにしかならなかった。

「おかあさん、死んじゃダメ」

返事はなかった。そのかわり、おかあさんはわたしをきつく抱きしめた。おかあさんにわたしのからだが融け込んでしまうほどに、おかあさんはやわらかかった。

夏の夜の湿った風が、わたしの髪を高く吹き上げる。

オリエとハルミのしゃくりあげる声が、二つの旋律のようにしてリビングから聞こえてきた。

わたしの耳元でおかあさんの息と声がした。

「ばか。死ぬわないでしょ」

その声は震えていた。

わたしは、おかあさんをしっかりと抱きとめた。そして、なぜか、幸福だった。

翌日、オリエとハルミはカスミの家を訪ねた。でも、呼び鈴を押しても、この日は応答がなかった。

ふたりは、次の日も、カスミの家を訪ねた。こんどはインタホンからカスミのおかあさんの応える声があり、オリエとハルミは家にあがった。

わたしは、もちろん、その場にいたわけではないので、ふたりの話を聞いたままに伝えるしかできないけれど、おかあさんは、意外な弔問に驚くこともなく、むしろ、それを予期していたかのように、笑顔でふたりを仏壇まで案内したという。

仏壇の前でお線香を上げ、手を合わせて祈り終えたふたりに、おかあさんは冷たいプリンを出した。

ふたりはそのプリンに手をつけずに、カスミのいじめについておかあさんに告白した。正確に言えば、そして驚いたことに、勇気がいるその仕事をしたのは、オリエではなくハルミだった。

あとで聞いたのだけれど、ちょうどこのころ、ハルミのおかあさんはもう長くはない、秋まではもたないだろうと医師から告げられたのだという。ハルミがカスミの家を訪ねる

決断をしたのは、そんなおかあさんの容態も関係していたのではないかと、わたしは思うのだ。

ハルミは泣きながら自分が音頭を取ってカスミをいじめたことを、カスミのおかあさんに告げたという。

その話を聞きながらも、おかあさんの笑みは消えなかったという。実際、おかあさんの目から涙は幾筋も流れ、流れやむことはないように思えたという。それでも、おかあさんの顔から笑みは消えなかったというのだ。

そして驚くことに、カスミのおかあさんは、カスミがいじめに遭っていたことを知っていたという。カスミが死んだのは、自分がそれに気づいていても何もしてあげられなかったからで、ハルミたちのせいではないと、カスミのおかあさんは言った。そして、見せたものがあるんですと、おかあさんは仏壇の引き出しから1冊のノートを取り出し、あるページをオリエとハルミの前で開いた。

そこにはカスミの文字があった。最初の1行を読んで、ふたりは震え、不思議さに打たれ、それから恐れた。なぜなら、そこにはこう書かれてあったからだ。

『おかあさんにランドセルを見られたくなかった』

ランドセルは、カスミの部屋の押し入れの中にあっただい。そこに、『死ぬ』と黒々と書かれた文字も、おかあさんは見つけた。カスミの自殺の原因がはじめにあったことを知り、最初は狂おしいほどに憤ったという。でも、カスミのおかあさんは、このことを学校にも警察にも言わなかった。それは、カスミの遺体の、あの小さな手の感触が思い出されてならなかったからだというのだ。

おかあさんが死んだカスミと会うことができたのは病院でだった。飛び降りたカスミは、目撃した人の通報で、救急車で病院へ運ばれた。おかあさんは買い物から帰ってきて、そのことを知り、それから病院へ急いだのだ。すでにカスミは亡くなっていた。おかあさんはカスミの手を握った。まだ、あたたかかった。おかあさんは、カスミが生まれてから死ぬまでの一切の時を、その手のぬくもりを通じて感じ取ったという。この手の、消えゆくうとするぬくもりこそが、カスミだと思ったという。

カスミがはじめにあっていたと知り、怒りに我を忘れたそののちに、カスミをいじめたカスミの同級生たちもまた、あのカスミと同じ小さくて温かい手を持っているのだと思っただい。あの小さな手。大人の手よりほんの少しだけ小さな手。あたたかくて、すばしっこくて、すべすべしている、少しだけ小さな手。たとえその小さな手が罪を犯した手だと

しても、そのすべての小さな手がみなカスミの小さな手に思われてきたのだという。そして、カスミのおかあさんはこう結論したという。カスミを死に追いやったのは、実は自分なのだ。おかあさんなのだ。

それから一ヶ月がたった。

夏休みが終わり、クラス中が高校受験の話題などでそわそわしはじめていた。

あの日以来、わたしはウィジャ盤を机の引き出しから一度も出していない。

それはウィジャ盤を無意味なものだと思っっているからではない。

ウィジャ盤が伝えた言葉は、確かにカスミの言葉であり、そして、おとうさんの言葉だと、わたしは信じている。

ハルミのおかあさんの危篤はまだ続いていた。そのハルミが、いつの日か、おかあさんと話をしたいとわたしに言うかもしれない。生きているときは一度も話したことのないおかあさんとハルミは、おかあさんが死ぬことによって初めて話せるようになるかもしれない。

い。そのためにも、ウィジャ盤は大切に持っていなくちゃいけない。

でも、ゼレが言ったように、死後の世界だとか、霊界だとか、まるでもう一つの地球のような死者のための星がどこかにあるようなには、今では思えない。リンダの文書が書いていたことも、その多くは人間の勝手な想像にすぎないと思う。

カスミもおとうさんも、どこか遠いところに行ってその姿を変えてしまったのだ。ゼレの言葉を借りれば、溶けてしまったのだ。でも、心だけは不思議なしかたで時間や空間を越えて、つながっているということ、わたしは知ったような気がする。そこでは、生も死も越えた、言葉では決して表現できない何かが息をしている。

それが何かなんて、わたしにはわかるはずがない。でも、確かにわたしはおとうさんとつながっているのだ、不思議なしかたで。

おかあさんは仕事を探し始めた。

でも、まだ見つからない。

もしかしたら、永遠に見つからないかもしれない。

それでもいい。わたしが高校に行かないで働けばいいのだから。わたしが働いたお金で

ご飯を食べればいいのだ。とてもシンプルだ。

おかあさんとふたりして、喜びだけでなく、不安や恐れもたつぷりと味わいながら、生きていくのだ。だって、胸で心臓が跳ってさえいけば、問題ないし。

(太田 穰)